ゲーテの詩

ゲーテの詩

Goethe's Gedichte

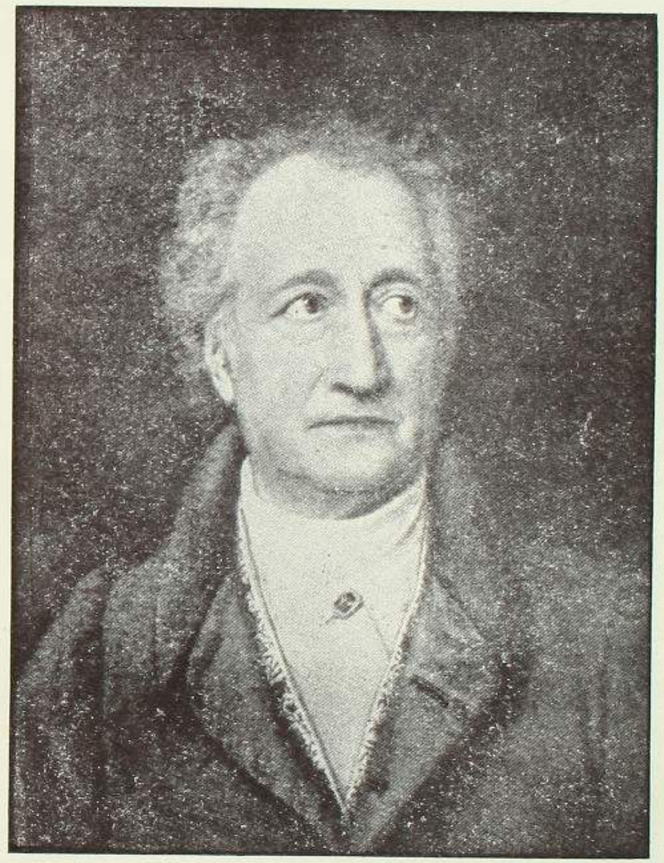
ゲエテの詩

An die Jugend.

„Jüngling, merke dir beizeiten,
Wo sich Geist und Sinn erhöht,
Daß die Muse zu begleiten,
Doch zu leiten nicht versteht!“

Goethe.

Goethes Familie.



Wolfgang Goethe.

一七六二年ゼエカッツの筆に成れるゲエテが家庭。左方前の二人はゲエテが双親、右方後の二人は少年のゲエテと其妹コルネリア。

序

ゲエテは大なる詩人なり。譬へば洪爐の如し、金銀鉛錫皆その鎔鑄に歸し、一として可ならざることなし。彫章琢句に屑々せず、鏤心刻骨に勞々せずして、自ら天馬羈を脱し飛儛遊戯するの勢あり、所謂力を用ゐずして手の觸るるところ忽ち春を生ずるは、實にゲエテの詩なり。

詩、吾を作るのみ、吾、詩を作るに非らずと云へるはゲエテに非らずや。我は詩の爲に玩ばるといへるはゲエテに非ずや。吾は鳥の歌ふ如く歌ふといへるもゲエテに非ずや。

古來の詩人、往々にして自ら僭して天來を云ふ。然かも思ふことなく考ふることなく、無爲にして化し無想にして生れ、所謂咳唾珠を成すゲエテの如きは、豈に天來の最も高きものに非ずや。

邦人好んでハイネを稱す、然れとも之をゲエテに比すれば殆んど一株儒のみ。その人品詩品の高下豈に啻に天壤の差のみならんや。

友人橋本青雨君は獨逸文學專攻の士也、曾てハイネ傳を著して好評あり。今や百尺竿頭一歩を進めて、ゲエテの詩幾十篇を邦文に飜へして以て世に問はんとす。その苦心慘憺決して夷の思ふ所に非らず。余はその世を訓ふるの深き、必ずやハイネ傳の右に出づべきを想うて、歡喜の情に堪へざるなり。

想ふに詩を論ずるは易く詩を作るは難し、而して詩歌の飜譯は實に難中の至難と謂はざるべからず。青雨君は自ら奮つてその難業を成就し、余は自ら恣にその卷頭に序して我が懶惰を世に表白す、厚顏恥を知らざるものと謂はざるべけんや。

シルレル百年祭の夕　竹風生

はしがき

ゲエテの詩の特長は何ぞ。又何が故に愛唱せられ、何の爲に尊重せるゝか。

一は情緒つねに眞にして生氣あればなり。その作のみな「大いなる懺悔錄の一節なる」が故なり。

二は用語悉く幽妙穩健、內容外形深く相融合すればなり。單純の語よく深長の意を寓し、語句の聲調全く情緒の曲節にかなひて、一語も添ふべからず、一字も刪るべからざるの妙趣あるが故なり。

三は自然の樂音を具ふればなり。是を以て其詩は、歌者の最も好んで諷ふ所となれり。

四は內部生命の豐富なればなり。情意悉く流

露して、高きあり、深きあり、幽婉なるあり、清麗なるあり、千態萬狀、有ゆる人情の極致を描きて無限の美觀を呈するが故なり。

是れマイエル氏の謂ゆる「自然を求めむとする詩人に非ずして、已に自然を有するの詩人、あらず、彼たゞちに自然たる」を以ての故のみ。

今こゝに其の詩を採り來つて邦語に譯せむとす。是れ實に至難中の至難とする所なり。散文といへども之を反譯するの難きは人のみな知る所、況んや情緒の聲調によつて初めて完全を期すべき詩歌の反譯に於てをや。天才あるひは能くすることあるべし、劣才譯者の如きもの、却つて唯

原詩を傷くるなからむかを恐るるのみ。されば譯者は敢へて之を以てゲエテが詩を譯し得たりと言はず、唯、原詩に就きて研究せむとする初學者の爲に聊か便あらしむとに過ぎざるなり。

さもあれ、わが邦ゲエテの名のみを知りて、未だ其詩を識らざるもの甚だ少からざるが如し。是れ譯者の常に遺憾とする所。若し此の拙譯にして幸ひに聊かゲエテを識るの端緒を開き、ゲエテ研究の趣味を喚起するを得ば、譯者の最も幸ひとする所なり。

ゲエテが長き其生涯（1794—1832）に於て、その諷咏せるところの詩、極めて多し。今こゝに掲げた

るは僅かに其の一小部分に過ぎず。然れども其の選擇に於て譯者は十分に意を用ひたり。

本書配列の順序は譚歌を除くの外は皆其の成れる年代に從ひ、且つ純感情に訴へたる(情詩)を先とし、次に思想を主としたる(想詩)を載せ、最後に譚歌を收めたり。

譯者は之を譯するに當りて、參考に資せる書籍少からず、今はたゞ其二三を掲けて研攢者の便に供せむ。

Goethes Lyrische Gedichte, *erklärt von Dr. J. Heuves,*
[*Schöninghs Ausgaben deutscher Klassiker*].
Ausgewährte Balladen Goethes (und Schillers) *mit*

Erläuterungen von Dr. J. Heuves, [,,].
Düntzer, Goethes lyrische Gedichte *erläutert.*
Viehoff, Goethes Gedichte *erläutert.*

又譯者は先輩及學友の助力を得たる所頗る多し。就中先輩上田文學士、學友、三浦白水、石倉後凋の兩文學士は譯者の微意に同情し、各多忙の身を以て補正指導の勞を執られたり。是れ譯者の感謝に堪へざる所なり。

出版者の事情と譯者の繁忙とは、遺憾ながら充分に修正の暇を有せしめず、惚惶の間に上梓するに至りたれば、從つて錯誤なきを保し難し。希くは江湖の諸賢が懇篤なる示教を得て、完を他日に

期せむことを。

明治三十八年五月　東京に於て　譯者

目次

情詩

迎と別れ……一
五月の歌……五
薔薇姫……九
新愛新生活……一一
戀しき人に……一四
湖上吟……一七
秋の思ひ……二〇
獵人が夕の歌……二一
旅人の夜の歌……二三

やすみなき戀……二五
月に寄す……二七
旅人の夜の歌……三一
ひかる魔の歌……三二
わかれし人に……三三
ミニヨンの歌……三五
彈琴師……四一
海の靜寂……四五
幸ある船路……四六
牧人の嘆……四七
涙の慰め……五〇
見いでたり……五三

互ひ〳〵に……五五
護符……五六
泣かしめよ……五七
スライカ……五九
春……六一
五月……六二
湖畔の秋の夜……六四
山上の曙光……六六
夏の夜……六七

想詩

マホメットの歌……七七

向上向前……七四
水精の歌……七七
プロメトイス……八〇
ガニィメット……八五
オイフロジィネ……八八

譚歌

伶人……一一七
トゥウレの王……一二一
魔王……一二四
漁夫……一二七
骸骨舞……一三〇

麗しき花……一三五
コリントの花嫁……一四四

目次終

ゲエテの詩

橋本青雨譯

迎と別れ

青春正に廿一歳、詩人しばらく靈想の翼を收めて、シトラスブルク大學に法律を學べる頃、程遠からぬゼエゼンハイムに『ヴエクフィイルドの牧師』が家庭をさながらなるブリオン牧師家とゆくりなくも相識りて、その麗はしき娘フリイデリケと淸らなる戀ひに憧れしが、詩思を催すの雨となりて、茲に幾篇多恨多情の花はさきにき。

胸とゞろきつ、駒飛ばせつ、
思ふ間もあらで我は行きぬ。
夕暮はやう地を眠らせ、
山々を夜は鎖しぬ。
かしこに闇は林より、
百の黒眼にみるところ、
樫樹は狹霧の衣きて、
たてり巨塔とものすごく。

雲の峯よりもれいでゝ
月哀しげにかすみつゝ、
輕き翼をそよがせて

風すさましく耳に鳴る。
夜はおそろしき光景うめど。
胸はをどりぬ、喜びぬ。
火こそはめぐれ、血の管に、
焔ぞもゆる、わがむねに。

汝を見つ、汝れが美しき眼は
われに注ぎぬ、歡喜を。
心はなれが身に飛びて
唯汝れをしも偲びにき。
薔薇くれなゐ春の雲
つゝむ面輪の麗はしさ、

あはれ、やさしの數々や、
望みき、されど當らじを。

あゝ、さりながら明けの日よ、
別れに嘆くこのこゝろ、
あはれ、歡喜くちつけに！
あはれ、悲哀なれが目に！
別れに立ちてうなだれて
涙に汝れは見送りし。
さはれ、戀する、何の幸！
戀せらるゝよ、何の幸！

五月の歌

春の五月はおほかた戀人の許に過しぬ。
戀をえて春に逢ふ、よろこび何ものかこれに如かむや。

麗はしいかな、
天地ほがらか。
日は輝いて、
野は笑ふ。

花はほころぶ、

枝ごとに、
百千の歌は
森ごとに、
快樂歡喜
胸ごとに。
あはれ、地、あはれ、日よ、
あはれ、樂み、あはれ、幸福。

あはれ、戀ひ、汝ぞ
かの空の
朝雲のごと
麗はしき。

かゞやく綠野
花の雲、
見わたすかぎり
なが惠。

あはれ、少女よ、少女子よ、
吾が汝を愛す、いかばかり。
あはれ、なが眼のやさしさよ、
汝が吾を愛す、いかばかり。

雲雀は愛す、
歌と風、

朝の花は
天の香を。

われも汝れをばかくもこそ
熱き血をもて愛すなれ。
その汝はわれに歡喜と
若き想ひと力とを、

わが歌くづに、わが舞ひに
その汝れこそは濺ぎけれ。
あはれ、とこよに幸あれな、
なが此われを愛づる間は。

薔薇姫

あはれ幸無き戀の別れよ。戀に昧める詩人の若き心は狂ひて、「いと麗はしきその人の心をいたくも傷けぬ。」死なむとまでに打悶ふるフリイデリケの憐らしさに、悔ゆれどかひなき吾が胸の惱みは、歌はゞせめて慰められむと。

童子は見たり、薔薇姫、
野中に立てる薔薇姫。
朝と若くらうたきに
急ぎてはせて近よりて、

眺めぬ、いたく喜びて。
薔薇、々々、紅の
野中に立てる薔薇姫。

童子は言へり、『汝を摘まむ、
野中に立てる薔薇姫。』
薔薇はいへり、『君さゝむ、
とこよに妾を偲ぶやう。
妾は堪へじを、滴まるゝに。』
薔薇、々々、紅の
野中に立てる薔薇姫。

あらき童子はそを摘めり、
野中に立てる薔薇姫を。
薔薇は戍りて刺しつれど、
なけど叫べど効ぞなき。
かくて憂へぬ、悲みぬ。
薔薇、々々、紅の
野中に立てる薔薇姫。

新愛新生活

廿六歳春まだ若きゲエテの胸に、新らしき愛ぞ芽ぐみいてたる。されど、富裕なる戀人の家に集まるものゝ驕慢、放逸、金簪銀燭、燦として眼を眩ずれども、

徒らに氣欝して嘔を催すのみ。さはれ、
戀しきは邪なき麗人、名を百合子（リ、イ。
シエネマン）といふ。あゝ、いかにかせむ、
往かむか、はた、歸らむか。

胸よ、わが胸、何いたむ、
など斯ういたく悶ふるぞ。
あゝ新なる奇しき生活や、
われぞ昨日の我れならぬ。
ながぬ愛せるはみな逝きぬ、
ながぬ憂へしもまた逝きぬ、
逝きぬ、勉勵も安息も。
あゝ、などて唯もだふるぞ。

若き命の春の花、
あゝかの姿、誠ある
やさしき眉目や迷はしし、
われを無限の力もて。
去らむとすれど、其の側へ
退かむと思ひさだむれど、
彼女が方へとたちまちに
路こそ我れをひきもどせ。

斷つよしも無き魔の糸に
思はぬ吾れをかくばかり

繋ぎとめしか、麗はしの
人迷はせの少女こそ。
その魔が中に立交り
心にもあらで過す世や。
あはれ、變りしわがこゝろ！
戀ひよ、われをば放てかし！

戀しき人に

同じ時、同じき人に、耐へがたき胸の
こがれと悶えとを歌ひていふ。

いかなれば汝は吾れ誘ふ。

華奢驕樂のその中に、
あはれ、さからふよしもなみ。
吾れよ、忠實なる若人は
さびしき夜ぞさばかりに
幸ありとしも思へるを。

月の影さす小さき家に
ひそかに我れは籠りけり。
すごき光を浴びつゝぞ
身を横へてまどろみし。

われは夢みき、濁なき

快樂の極み、黄金の
清くたうとき時の間を。
われは想ひき、此の胸の
心の奥にいと深く
ながれはしき其の姿。

われは猶ほしも我なりや、
ひかり輝く小机の
ほとりに汝れにとゞめられ、
いと耐へがたき人々の
面とむかひてあまたゝひ
立てりし吾か、今もなほ。

あはれ、野にさく春花も、
汝れにまさりて麗はしと
我れはしも見ず、美くしと。
天使よ、汝れのあるところ、
戀あり、愛あり、情あり、
ながあるところ、自然あり。

湖上吟

戀といとひに悶えわづらひしかど、さすがに其のたかく清き心は、棄てがたき思ひを斷ちて、自然の清らけき懷に抱かれむと、なつかしき百合子が許をたち去りつゝ、友と二人チュウリッヒの湖に遊

びぬ。

ひろき世界にわれは吸ひぬ、
澄める朝の香新血潮。
あゝ、げにわれを胸に抱く
自然やさしく情あるかな。
あやつる櫂の調子につれて
波は冲へと小舟いざなひ、
雲際たかく聳え立ちたる
群山われらが舟路に對ふ。
眼よ、わがめよ、など沈む。

またも黄金の夢見てか。
逝けかし、あゝ、夢、美しくとも。
こゝにも愛あり、命あり。

波間〳〵にゆらぎつゝ
きらめく星の影しげく、
遠き周りの山々は
やわき狹霧にかくろひて、
小暗き海のおもてには
あけぼのゝ風戯ぎつゝ、
たわゝに熟る枝の實の
その影映す水かゞみ。

秋の思ひ

あはれ哀しき戀のわかれや。われから
抑ふる胸の悶えは、漲り溢れて永しへの
涙と流るゝ。見よ、自然の母の子らをば
ごくむさまの、何ぞわがこの胸の悶えと
似たる。—同じき年の秋九月、百合子を
しのぶ涙に泣きぬ。

此處わが窓のにして
棚の葡萄の葉よ、しげれ、
綠せよかし、露しげく。
玉の双生兒よ、ふくらみて

みのれよ、早く麗はしく。
別れを告ぐる日の母に
暖められて、情ある
天のやしなふ雨に濡れ、
風に吹かれて育ちつゝ、
やさしく奇しき夕月の
氣息に冷えて露むすぶ、
あはれ二つのこの眼より
あふれていづる永久に
生くなる愛のその涙。

獵人がケの歌

これ、將、おそらくは百合子を偲べる歌、
明くる年の初めに世に出づ。

野路を徐かに胸はそゞろに、
火銃丸こめ我れたどる時、
汝があえかなるその面影
その美くしき面影しのぶ。

汝れ今たどらむ、ひとり靜に
麗はしき野路また谿間を。
見えては消えゆくわが姿を
しばしも汝れは思ひやいづる、

汝れを失ひ行くへも知らに
彷徨ふ方や西またひがし、
心はなやみ氣は結ぼゝれ
世界のはてゆくわが姿を。

さもあれ汝れを偲ぶときは
月の光に向へるごとく、
しづけき平和胸にぞ落つる、
いかなる故ともわれは知らねど。

旅人の夜の歌

一七七年の晩冬より、請ゼンバーワイ

マアル侯が客となりしかど、九重の雲はいたづらに華やかにして、貴人の嫉みさへ身に負へりき。況してや、主ある麗人と思ひ思はるゝ安からぬ心は、さながらに旅ゆく人にも似たるをや。

平和よ、天に生れて
和むるか、憂さも辛さも。
哀しみの深きものには
いやふかく汝は慰むる。
煩らひに我れは倦んじぬ、
樂や苦やそも何ならむ。
來れかし、はしき平和、

來れかし、あゝこの胸に。

やすみなき戀

主ある花のシタイン夫人は情ふかく趣味たかき名だゝる宮女なり。かたみに思ひぬ、思はれぬ、されど、主あるをいかにせむ。明る年の夏の初め、イルメナウの邊なる山にして、悶ふる胸より溢れいでつるはやがて此の歌。

雪に雨に
風にむかひて
けぶる岩間

狹霧をつらぬき
いづくまでも！いづくまでも！
安息なく、憩ひなく！

現し世のいと多き
歡喜を受けむより
むしろ、いざ、我はしも
悶えまし、苦しみに。
心ごゝろの
相思ふが
あはれ、など斯う
あやしくも

なべて惱みとなりぬらむ。
いかにして免かれむ、
かの森に行かむ、そも。
よろづ、みな、効ぞなき。
人の世の王冠や、
安息なき樂しみや、
あはれ、戀、汝れこそは。

月に寄す

ふたゝび朧の汝が光は
靜かに森かげ溪間に充ちて、

今こそ汝れはわが心を
殘る隈なく和らげ行くか。

庭の面しづかに
ひろごり來りて、
わが身の運命あはれむ友の
やさしき眼に似る汝が光。

たのしき悲しき昔のおもひで
むかしの思出こゝろに充ちて、
樂しみ悲しみ二つの境に
さびしき此夜をひとりさまよふ。

逝け、逝け、河水。とこしなへに
わが身は樂しき人としならじ。
詼謔、くちつけ、まことよ、皆
さながら消えつれ、今こそ、嗚呼。

されど昔はわれも一たび
世になく尊きもの持ちにし、
その過ぎさりし樂しき時よ、
悲しや、心にえぞ忘られぬ。

流れよ、河水、さらば、溪間を、

とゞまることなく休むことなく
流れよ、流れていざわが歌に
その美はしき調を添へよ。

冬の夜波たて
なが躍るとき、
春の夜若葉の
かげに湧くとき、

恨みはわすれ
世に遠ざかり
ひとりの友と
たゞ二人して、

宵々こゝろの
奥をさまよふ
世の人しらぬ
思ひをわかたば。

旅人の夜の歌

山のいたゞき
安息あり、
樹々の梢に
風やみて
森には鳥の聲も無し。

待てしばし
汝れも休まむ、やがてまた。

ひかる魔の歌

人の寐るてふ夜半にして
われらを月は照らしつゝ
われらを星はかゞやかす。
われら彷徨ふ、かつ歌ひ
かつ躍りつゝよろこびて。
人の寐るてふ夜半にして
草原の上、樹の蔭に

われらがところ求めつゝ、
さまよひめぐる、かつ歌ひ
かつ夢の舞ひまひながら。

わかれし人に

おそらくはイタリヤの旅路にて戀しき人妻(シタイン夫人)を偲べる歌、いたく時たちし後に世には出てたれど。

然るをまことに別れしや。
美はしの君、去れりとや。
馴れにし耳になほひびく

君が言の葉、君が聲。

蒼空ふかく身をかくし
高きに雲雀うたふ時、
旅人の目のあけぼのに
かひなく空を望むごと、

君ぞたづぬる、ここかしこ。
憂への眼もて野を森を
わが歌ぞみな君を呼ぶ。
戀しの君よ、かへれかし。

ミニョンの歌

ミニョンはゲエテが名だかき小説、『ヰルヘルム・マイステルが修養時代』の女主人公なり。花かぐはしく風暖かなるイタリヤに生れ、幼きに母の手を離れて人の養ふ所となりけるが、養親の戒めゆるやかなるまゝに、ひとり野に山に美しき夢に憧れつゝ、路なき路を彷徨ふをならひとしき。一日、遂に歸らざりしを、人々は溪間に落ちて死にけるか、將た程近き海に溺れしかと尋れたれども亡骸さへも見出でざりけり。さはれ、まことは輕業師の群にかどはかされ、アルペンの峰越えて、暖かく麗はしき故里より、北風寒む

き獨逸の國には連れられけるなり。その時ミニョンは餘りの悲しさに、聖母マリアに救ひを祈りつゝ、かつわが身の上わが胸の思ひを人に語らじと固く誓ひき。マイステルその麗しき十三の少女の、謎のやうに解きがたき性質に心ひかされ、綱渡師が無慘の手より救ひて、わが子と愛てゝ養ひぬ。さはれ、誓ひは破られじ、昔のわが身と心の底とは、恩あり情あるその人にさへ打ちも明けられぬ心の苦しき、など隔つるぞと責むるらむ其眼光こそ、げに身を切らるゝ思ひなりけれ。

その一

語れといひそ、秘めよと告らせ、
秘むるはわが身の義務なれば。

君に告げまし、胸の思ひを
されど許さぬ運命をいかに。

時し來れば朝日の光
暗き夜追ひてわが世を照らし、
かたき巖も胸をひらきて
深き底ひの泉も湧くを。

友の腕に安慰もとめば
流れも出でなむ、胸の惱み、
されど誓ひはわが口とぢぬ、
そをし開くはたゞ神ひとり。

その二

憧憬を知れる人のみぞたゞ
たどりしるべきわがこの惱み。
世のたのしみに
ひとり離れて、
見やる遙けき
かなたの御空。
われを憐しみわれを識りし
人は何處ぞ、とほき彼方。
あゝ目は眩み、
胸こそ燃ゆれ。
憧憬を知れる人のみぞたゞ

たどりしるべきわがこの惱み。

その三

ミニョンはマイステルに從ひて俳優と
なりぬ。切なき惱みと悶えとにやう〳〵
衰へゆく此の身もやがて、盡きなむ命ぞ
と覺ゆるある日、舞臺に上りて天使に扮
しぬ。さる双兒の姉妹に賜物下すが役な
りき。ミニョンは長く輕やかなる眞白き
衣を裝ひ、胸には黄金の帶、髪にも黄金
の簪をさして、黄金かがやく天使の羽さ
へ着けつ、手には百合の花をかざして場
には現はれたり。幕下りて退きし時、人
々衣更へしめむとすれば、ミニョンそを
拒みて、三弦琴ひきつゝ清らの聲にぞ歌
ひいでつる。

斯くあらしめよ、かゝるまで、
ぬがせな、白きこの衣を。
この美はしき地の下に
われはいそがむ、堅き家に。

静かにやすらはゞ、
光明の世は開くべし。
われ脱ぎすてむ、白衣も
帶も花圈もことごとく。

かの天上の御姿よ、
男性女性にわづらはぬ、

一重の衣一襞も
つけぬ浄化の御肌。

『うれへ煩ひ無かりしが、
苦痛はあまり深かりし。
もだえに早う年老いぬ、
若がへらせよ、とこしへに。』

彈琴師

彈琴師も亦ミニヨンとともに『修養時代』に描かれたる憐なる面影なり。むごき運命の手に弄ばれて故里を遁れいで、ミニヨンのやうに亦マイステルの情に救はれ

しかど、若かりし罪の記憶は絶えず心を惱ましむるに、世の歡びにも樂みにも打ちそむきつゝ、ひとへに藝術に慰籍を求めぬ。樂に幽玄の響こもりて、一彈たちまち神人を泣かしむるは、甚深の悲痛胸劈いて溢るればなりけり。

身をさびしさに委ぬるは、
吁ただひとりあればこそ。
人たのしめど愛すれど、
彼は苦痛に棄てらるる。
然なり、我をも悲しみに
ふりすてよかし、若し我の

まことさびしくある時よ、
まこと一人にあらずかし。
ひそみ忍びて戀人の
ひとりありやと訪ふがごと、
訪ふや、夜となく晝となく
さびしき我を、くるしみぞ、
さびしき我を、かなしみぞ。
ああ、いつしかも奥津城に
淋しくあらむ時ぞ、吾を
惱みはひとりあらしめむ。

その二

戸ごと戸ごとを彷徨ひめぐり、

ものしづやかに立ちつつ居らむ。
やさしき手より物こひうけて、
かくてぞ行かまし、猶ほも遙けく。

わが立つ姿にひきくらべつつ、
人みな已れを幸と思ひて、
涙に泣かむ、しかはあれども、
その泣く心われは思はじ。

その三

涙の下に物くらひ、
憂の夜ごとを泣きわびて、
臥床に起きじものならで、

天の權威を誰か知る。
天の權威に人は生き、
弱きは罪におちいりて、
なやみに人は棄てられつ、
罪をこの土につくなへと。

海の靜寂

深き靜寂わだつみを領ず。
閑然として海なぎたり。
舟人そゞろ憂へながむる、
鏡の如き水の面。

あゝ、いづらにも風はとだえぬ、
凄じや、死の靜寂。
淼々遠きかなたにも
一波のゆるぐなし。

幸ある航路

狹霧劈け
天ほがらか。
風伯うれふる
緒をしとけば、
颯と風さわぎ
舟は飛ぶ。

『早し、はやし、
濤押分れ、
遠もちかづき
陸こそ見ゆれ。』

牧人の嘆

高きかなたの山にして
われは立ちけり、百千たび。
杖に身をよせ、たゞひとり
溪底とほく瞰下しぬ。
羊は犬にまもらせて

後よりひとり辿るわれ、
思ひは長き山路を
歩むも夢の心地して。

牧場にあまる百千草
花も麗はし、種々の、
贈るを誰れとわかずして
摘みけり、われは其の花を、

雨に嵐になる神に
われ身を容るゝその樹蔭
柴の扉は今とぢて

夢となりぬる、物みなは。

その屋根こえて麗はしく
懸る御空の虹の橋。
わか思ふ人今あらず、
遠き異國の旅にして。

げに旅立ちぬ、外つ國に、
海路わたりて遙々と。
いざ、往け、羊、往けよ、いざ、
げにこそ惱め、わがこゝろ。

涙の慰め

など然は君のなげくらむ、
よろづ樂しく見えつるに。
その眼にこそはからるれ、
あゝげに、君は泣きけりな。

「われはさびしく泣きぬれど、
そは唯おのが惱みのみ、
涙はうまく流れつゝ
わが胸をしも休めしむ。」

樂しき友ぞ君を呼ぶ、
われらが胸に寄れよかし。
何失へる？何なりと
我等につげよ、へだてなく。

「何に悶ふる我なるか、
よし騒ぐとも悟らじな。
ああ、いな、我は失はず、
有だざりしをや、初より。」

さば疾く心ふりおこせ。
君青春の若人よ、

君が齡に力あり、
覓めて獲るに勇氣(いさみ)あり。

「ああ、いな、われは覓めえず、
そは、げに、あまり遠くして
かしこ御空の星のごと
高く清らにかがやくを。」

星はのぞむも獲られじを、
その光こそ樂しまめ。
されば人はうれしみて
晴れし夜ごとを仰ぎ見る。

「されば よ、われはよろこびて
うれしかる日を仰ぎ見る。
ああ宵々を泣をしめよ、
われの泣かるるその間(ひま)は。」

見いでたり

妻のクリスチアネと初の逢瀬の其のかたみぐさ。

深く思ひにふけりつつ、
森にぞ行きし、われひとり、

何もとむともあらずして。
かくこそわれは望みしか。

日かげにわれは見いでたり、
小さき花の咲きつるを、
星の如くにかがやきて
天使のごとく美しき。

摘まむとすれば、いぢらしく
花の言ひらく「はかなくも
摘まれてしぼみはてつべき
わが身か、あはれ、かなしや」と。

生ひひろごれる根を擧げて、
われは花をば堀りいでつ、
清けき家のほとりなる
庭にたづさへ歸りつゝ、

しづけきところえりいでて、
移しうゑけり、改めて。
今しいよいよ枝さかえ、
花もこそ咲け、絶えまなく。

互ひに

吊鐘草の、

地をいでて、
早う芽みぬ、
美しき野に。
小蜂しのびて
言ひよりぬ。
よりつよらるる運命なるかも。

護符

東洋も神のもの、
西洋も神のもの。
南北の國々は

静かに休め、その御手にこそ。
唯一正義の大神は
人に平等の權を賜ふ。
百の御名により
崇めまつれよ、敬しみて。

泣かしめよ

泣かしめよ、眞夜中に
限りなき砂漠の果にして
駱駝は憩ひ御者も休めり。
静かに錢かぞへつゝ、アルメニヤ人は
起きたり。

我も側へに道程かぞふる、
いかばかりスライカと隔たりしやと。
又も偲ぶ、長びきにたる
迂回り曲折りし路路を。
泣かしめよ、泣くは耻辱ならじ。
泣く男子ぞよき。
アヒルはブリザイスの爲に泣きしぞ。
クセルクセスは滅べる軍兵の爲めに泣き、
アレキサンデルは自ら死にたる愛者を
嘆きき。
泣かしめよ、涙は塵を活かして、
早くも登れ、水蒸氣こそ。

スライカ

ああ、汝がまめれる戰ぎをこそは、
西風よ、いたくもわれは羨め。
わかれて悲しむわがこの思ひ、
汝こそたよりを君にもたらせ。

なれが翼の搖めきこそは
胸に靜けき憧憬さませ。
花や草野や林や丘や
なれが吐息に涙をながす。

なれ柔かくやさしく吹けば、
眼ぢめりて涙ぞうかぶ。
あはれ、惱みにわれはも死なむ。
また相見むともわれは思はじ。

行けかし西風、わが戀人に、
告げよ、やさしく君が御胸に。
さはれ、君をな嘆かせまつりそ、
つつめよ、君にはわが惱みをば、

たゞ言へ、さもあれ、いとしとやかに。
「君戀ふこそわが命なれ、

戀と命のうれしき思ひも
御側にしてこそわれには起れ」と。

春

春の日影は美しき谷間を
百の木ぐさの花もて充しぬ。
胸にわきたつ高き思ひを
歌ふやうぐひす新しきうた。
神のたびたる賜物享けよ。
樂しむ人の子、空にて見まさば
嬉しと思さめ、われらが神も。

五月

うぐひす行けるを
春またいざなふ。
新らたなるをば
えこそ學ばね、
歌ふや、昔の美しき歌。

湖畔の秋の夜

ゆふべ空よりたそがれて
近きも闇に消ゆるとき、
西の方なる夕づゝの
やさしき光たゞひとつ。
霧たちのぼり遠近の

野山の影もおぼろにて、
水に映りて烏羽玉の
闇は潮にぞかゝりける。

今ひんがしの御空より
昇る月かげ見えそめて、
風になびきて潮の面に
垂るゝ岸邊の糸柳。
そよぐ木の葉に影うごく
月の光は清くして
げに眼より入る涼しさは
胸にぞ深くしみわたる。

山上の曙光

ほの〳〵白む明けの光に、
はやも世界はうちぞ開きて、
森は百千の聲音にとよみ、
谿間谿の外狹霧さまよふ。
天の光は低きに落ちて、
沈みて眠れる香ぐはし崕に
下枝ほつ枝の甦がへりつゝ、
色彩と色彩とは明に分れ、
花、葉、眞珠の露にそぼちし
地、ぬきんでて芽ぐみ出でつる。

あはれ、見渡す我が世の光景は、
さながら天なる御國なるかな。

ああ、仰ぎ見よ、山の頂、
はやこそ告げつれ、光榮ある時を。
永世の光を山先づ受くるや、
後にぞ下りて我等を照す。
今やアルペン綠小暗き
野面に擴がる新の光輝、
一歩一歩降りゆきつゝ
さと此處さしくる光まばゆや、
眼の痛みに面ぞ背向くる。

夏の夜

緑は深き野のほとりに
涼しき夕風おとなひ來れば、
霧もかすみも棚曳きわたりて
日はやう〳〵に黄昏れてゆく。
平和のさゝやき低きを聞きて
無我有の境に心はやすみ、
一日の惱みに疲れはてゝ
人の眼瞼と今ぞ閉ちたる。
人の世しづかに夜は更けわたり

並べるたうとき星影いくつ、
つよき光、弱き火影、
あらは靜けき海の面に、
あらは晴るゝ夜高き御空に、
近く輝き遠く燦めく。
この夜の平和の幸みたすと
まどかの月影夜をこそ守れ。

マホメットの歌

見よ、岩間の泉、
星光の如く
歡喜にかがやくを。

雲の上へはるかに
やさしき精靈、
林の中なる岩狹間に、
若き泉をはごぐみつ。
血氣のさかりを
雲より出でて、
躍り下るや、大理岩上、
再び歡呼す、
天にむかひて。

山の巔谿間を貫き、
五彩の小石を轉し馳せて

早くも首領の態度をあらはし、
併せてぞゆく、
泉の同胞。

谿に下れば
足下に
花さき、
草原氣息に
いきふきかへす。

然はあれども日蔭の谿も
膝かきいだきて

戀の眼に媚ぶらむ花も
ひきぞ止めむよすがもあらず。
路はひとへに平野に迫る、
大蛇の如くにうねりうねりて。

いささ谿河靡きまつはり。
今や大流燦爛として
白銀のごと平野に進めば、
野も亦ともに照り輝きつ。
小川は野邊より
谿河山より
歡び呼ぶや、『あはれ同胞、

同胞われらを導け、共に、
共に御身が遠つ御祖に、
憧れよるもの抱きいれむと
あはれ、むなしく腕おしひろげて、
我等を待てる久遠の海に。

荒れたる砂漠の渴ける砂は、
われらを飲むなり、天なる日は
わららが血潮をむさぼり吸ひて、
丘はさへぎる、沼への路を。
同胞、導け、われ等を野より、
導け、われ等を山より共に、

共に御身が遠つ御祖に。』

『來れいざもろともに！』
崇くおごそか今ぞ漲る。
全族君公をば高く戴き、
凱歌を奏して韡韡轉下し、
大河は國土に名をのらせつつ、
都城いくばく脚下に蹈まふ。

休まず懈まず更に進んで、
殘し留むる大塔の、
輝く絶頂、燦然たる

大厦高樓大功業。

巨人の如き双肩に
アトラスは大船巨舶を載せて、
百千の旗四方の風に
それの頭上にひらめき鳴りて、
その崇嚴の光榮をぞ示す。

かくてぞ大河はそが同胞、
そが愛づるもの、その子をば
導け、歡呼の聲を揚げつつ、
待てる生母がその胸にこそ。

向ふ向前

見よ、夕陽の燃ゆる焔に
翠緑の中輝く小家を。
大陽はゆきてかくろへど、日影は残れり。

かしこに急ぎて新世をしも求むるか。
追ひつゝかしこへ往かむとすれど、
かなしや、乗せなむ翼のあらぬ。

久遠夕日のその光に
わが立つ下に静けき世、

燃ゆる山々、鎮まる谷々、
銀河黄金の波あげて
駛るを眺めむよしあらば、
嶮しき山も谿々も
神力籠れる道は止めじ。
渡津海かすめる入江と共に
愕くわが眼の前にぞ開くる。
日の神遂に沈むと見ゆれど
想ひ新に胸に目ざめて
久遠の御光呑まむと急ぐや。
前に日、後に夜、
頭上に大空、足下に波、

美しき夢の間に太陽は沈めり！
噫、肉の翼はいかで容易く
靈の翼と爭はるべき。
頭上蒼空にかくれつゝ、
雲雀の高く歌うたふ時、
嶮しき樫の山の上を
鷲揚然として漂ふ時、
野越え山起え海越えて、
田鶴の故郷に飛ぶ時よ、
げにや、感情の上に、前に、
向ひて逼るぞ天賦のたまもの。

水精の歌

人の精神は
水の如し。
天より來りて
天に登り、
再び降りて
地にこそ還れ、
とはに迭みに變りつゝ。

高く嶮はしき
懸崖より、

純なる光と流れいでて、
雲の波間の
滑らかなる岩に、
麗しく散じて
かるく飛んでは、
生絹をかけて
潺湲渦まき
谷間に流る。

絶壁聳えて
急瀬をせけば、
憤然走りて

段を刻んで
深き淵にぞ泡立ち下る。

平原青野の
谷しのびゆき、
海と湛ふれば、
有りとある星
面を洗ひて清らにさゆる。

風はやさしき
波の戀人、
さもあれ、風は

濤わきたつる。

人の精神よ、
波にぞ似たる。
人の運命よ、
風にぞにたる。

プロメトイス

はかなき烟、雲をもて、
ツォイスよ、汝が天をおほへよ。
蘇の首をはねて誇る、
童子のごとくに、山の上に

槲の林に汝をならせ。
さはれ、わが地は
わがまゝなるべし、
汝が造りしにあらぬ我が家も、
わが爐亦わがまゝぞ。
そが焔にこそ
汝は我をねたむなれ。

日の下、神々汝等にまさりて
憐れなるもの亦あらじな。
その乏しきを嘆きつゝ唯
犧牲の牡牛

祈禱の息に
なんぢが權威を養ふのみ。
汝等餓えなむ、乞食童子ら
かひなく祈る痴者あらずげ。

幼きむかしは
周章て狼狽めき、
若しわが嘆きを聞き耳ありやと、
悶ふるものをば憐む心の
若しも有りやと、
迷へるわが眼を
向けて空をば仰ぎたりしか。

我を助けてチタネン族の
横暴懲せるものありしか。
そも又死より奴隷より
我を救へるものありしか。
神聖くも燃立つわがこの精神、
精神ぞ自ら物みなしとげし。
若くやさしく、欺かれつゝ
汝れは天なる眠れるものに
救ひの恩をば負へりと言ふか。

汝れ崇めむや、何の爲め。
まこと汝は惱めるものの、

悲み和げ輕めしや。
まこと汝は憂ふるものの
涙を鎮め止めしや。
我れを男の子に鍛上げしは、
全能の時、
久遠の運命、
わが君、汝が君にあらずや。

花麗はしき夢みなの
實を結ばずば、我はしも
世をば惡みて荒れし野の
果に逃ると思ひしや。

われ此處に在り、此處にありて
わが面影にならひつゝ
人間を造らむ、我れに肖たる
種族つくらむ、惱みつ、泣きつ、
よろこび樂しむ、しかはあれど、
汝を崇めぬ、
われの如くに。

ガニィメツト

あはれ、朝の輝きに
わが身のめぐり燃えたつる
春よ、ああ、わが戀人よ。

百千の戀の歡喜に
わが胸そゞろときめかす
ながの永しへの溫かき
聖けき思ひ、あな、あはれ、
限り知られぬ麗はしさ。

なれをまかましし
この腕に。

あゝ、汝が胸に憧るゝ
此身しづかに横ふれば、
汝が種々の花や草や、

むつみ戯るわが胸に。
汝れこそ覺ゆめ、燃えに燃ゆる
わがこの胸の渴きをば。
あはれ、涼しき朝の風、
霧たちこむる溪間より
やさし鶯われを呼ぶ。
われ來ぬ、〳〵、然はあれど、
あはれいづくへ？いづくへ？あはれ、

天へ天へと胸悶ふれば、
雲は地へと搖めき降る。
雲は憧るる戀人の

方へとこそは迷ひ來れ。
げに、我れにこそ、我れにこそ！
いざ、その膝に！
天の上に！
抱き抱かれ天の上に
あゝ、なが胸に！
愛の大神！

オイフロジィネ

オイフロジィネは眞の名をクリスチアネ・ノイマンといふ。ヴイマアル宮庭の俳優ベッケルが若き妻なり。幼うして父を失へるを憐がりて、ゲエテは自らやさし

う生し育てつゝ、クロナ・シュレエテルと共に梨園の明星たらしめむとて切りに心を碎きけるが、思ふに違はず其の十三歳の初舞臺のシエクスピイアが「ジョン王」の皇子アアサアに扮して大喝采を博しにき。而もその演習の際は詩人自ら試みに敵役ヒユウバアトに扮して、アアサアの眼を盲しめむとする一場を演じたりしなり。オイフロジィネ（クスリチアネが最終に演じたる樂劇の役名よりゲエテは此詩にかく呼べり）芳齡やうゝ十九才、天才いよゝ發揚せむとして、一七九七年九月花の命は脆くも散り失せたり。恰も旅路のなかばに此の訃に接せる我が老詩人の悲みいかなりけむ、たゞちに紀念の詩をさゝけて在天の若き靈をとぶらはむと思ひ

たちけるが、翌年七月に至りてやうく
に、涙とともに此の哀歌は成りぬ。

アルペンの最高峰

氷雪とざせる絶巓にも
落日の紫光消えさりぬ。
夜は夙く溪間を鎖して
旅ゆく人の路をつゝみぬ。
たぎつ急瀬のほとりの草の舍、
その日の宿と思ひもうけし
牧人がその静けき小家に
わが旅人ぞ憧るゝなる。

旅人がやさしき友、美き睡眠、
はや快う催し來る。
睡眠よ、けふ亦聖なる瞿粟を
頭に飾りて我れをば惠め。

さはれ、何もの？かしこの岩より
燦爛こなたを照らしつゝ、
泡だつ流れの夕霞を
かく美はしく輝かすは？
そことも知らぬ岩間を洩れて
夕日の射入るその光か！
かしこに搖めくその光は

げにもこの世のそれにはあらじ。
雲捲き近づき焔と燃ゆる、
あやしや、見る〳〵薔薇と紅き
光は動めく姿となりぬ。
何の女神や現じたまへる、
何れの詩の神さびしき岩間に
この我れ信の友をば覓むる。
麗はし女神よ、名のらせたまへ。
消えて靈化のわがこの想ひ
情に感けるこの心を
な欺きそ、やよ、御神、
有限の此の身に告げらるべくば

告げさせ給へな、尊き御名を。
さらずはッォイス大神の
久遠の姫の誰にかあるらむ、
明らに我れには悟らせ給へ。
詩人たゞちに謹しみ畏み
歌に御神頌ぎこそまつらめ。

『君よ、はやうも忘れしや、
昔は君の愛でましゝ
此の俤をみとめずや。
命はこの世にあらねども、
震ふ心は若うして

佗びて快樂を離りしかど、
われは望みき、面影の
なほしも友の記憶に
深く刻まれ美はしく
愛にぞ理想化られけむと。
あゝ、感げりや、その君の
眼色こそは涙こそ
われには語れ。われこそ、君、
オイフロジィネぞ、未だ忘れじな。

あゝ、逝くわれぞものすごき
野山を越えて、遠方に

辿らむ前に求めて來りぬ、
彷徨ふ君を、師の君、わが友、
わが父をしも今一たび
求めて脆き塵の世の
快樂享けむと歸り來ぬ。

思いでしめよ、そのむかし
幼きわれをば藝術の神に
君の捧げし其のむかし。
思いでしめよ、そのかみの
かの種々の記念をば。
ああ、復た還すよしも無きに

誰がそもかくは思出しむる。
あゝ、このはかなく消えゆく快樂
誰がそも其時貴しとせむや。
些やかには見ゆ、然かはあれど、
ああ、この胸には些やかならず、
輕きもよろづ藝術こそ、
愛こそはげに重うすれ。
高き藝術のいつくしき
演戯の場に君の吾を
伴ひし時覺ゆるや。

われは可憐の童子に扮し

君はわれをばアアサアと、
呼びてぞ英の詩人の
描ける姿よび活し、
怒にもゆる焔もて
哀なる眼をつぶさむと
赫ししされどいと深く
胸は感きて演戯てふ
心わすれてまこと流るゝ
涙の面を君は脊向けき。

あゝ、その時よ、君はやさしく
憐の命をいたはりしかど、

童子は遂に不敵の逃走に
その命をばあへなく落しぬ。
滅ぼされにし我れはやさしく
君に抱かれかき運ばれて
しばらく君が御胸に凭れ
死をこそいつはりねたりしか。

かくて眼をうちひらけば、
静かに深き思に沈みて
愛する童子の面みつめつゝ
打傾きて君はおはしき。

童女の如くに仲上りつゝ
御手に謝恩の接吻しつゝ
うれしむ唇清き接吻にと
君に捧げて我は問ひにき、
(父よ、など然はいかめしき
面し給ふ? われ過たば
教へてよ、たゞ如何にせば、
なほよき功は收めるべき。
御身と共に執るならば
いかなる勞もいとはじを。
君みちびかば、教へなば、
くりぞかへさむ、よろこびて

いくたびも猶ほ物みなを。）

君はわれをばひきよせて、
腕にひしと抱きしめぬ。
胸の心の奥ふかく
われは震へを覺えにき。
《否、わが愛しき子よ、》と君、
《けふ汝が演しものみなを
明日また公衆に示せかし。
われ泣かしつる今日のごと
明日も泣かせよ、人みなを。
あゝ、かの涸れし眼より

崇き涙を頌詞と
人みな汝れに濺がなむ。

さはれ、腕に汝れ抱きつゝ、
假相と知る〳〵あまりに若き
汝が死にさへも愕きし
われや、ながが友、いと深く
深くぞ汝れを憂へにし。

あはれ、自然よ、萬象に
現じいでつる汝が姿、
あゝ何ぞかく堅く大なる。

見よ、天地のとことはに
不易の法則に從ふを。
年は來りて歳は去り、
行く春、夏と手を握り、
冬悲しげに豐饒なる
秋に別れの詞つぐ。
岩が根かたく聳え立ち
久遠の水は雲ふかき
高根の岩間わき出でゝ
たぎち落つるよ、あらびつゝ。
樫はときはの緑こく、
木の葉ちりぬる林さへ

冬の最中をひそやかの
芽こそはもてれ、その枝に。
萬象法則に從ひて
あるひは生れあるは逝く。
されど尊き人の世は
ゆらぐ運命の手にありて、
胸やすらかに逝く父の
塚のほとりに親しくも
盛の花の秀れ子に
別れ告ぐると定らず、
若しといへど必ずしも
老いのよろこび閉づる眼を

閉ぢしむるとは定らず、
強しといへど必ずしも
弱きものゝ眼閉ぢしむと
定まれるにはあらぬをや。
あゝ、動もすれば人の生の
運命と順序とくつがへり、
かひなく孫子打嘆く
たよりなき老い、さながらに
瀧とたばしる玉霰に
枝葉倒され散されて
哀れに立てる幹のごと。

愛しき少女よ、亡骸に
身をば扮してこの腕に
汝がかゝりけるかの時よ、
かゝる思ひのいとふかく
此の胸をしぞ貫きし。
さはれ、ふたゝび若き命の
かゞやくばかり麗しう
わがこの胸に甦がへる
汝を見るこそうれしけれ。
よろこび飛びゆけ、扮はる童よ、
少女ぞ此の世の樂しみに
わがよろこびに人となりぬる。

絶えせず力めよ、進みゆく
なが生涯の歩の一歩ごとに
天賦の才こそ藝術を産まむ。
長くこの身を樂しましめよ、
わがこの眼を閉ぢなむ前に、
希ふはまたく磨き上げたる
汝が美はしき天來の
才をば我に見せしめよ。)

かく宣まひき、われも亦
重き其時忘れずて
崇き御言を守りつゝ

勵みて効驗あらはしき。
わが幼なき唇に
まかせ給ひしいと深き
いみじき君が御言葉を、
あゝいかばかり喜びて
公衆にはわれの演べにけむ。
敎ふる君が眼によりて
いかに此の身を演じけむ。
駭き愛づる人々の
群がる中にいかばかり
あゝ、君をしも求めけむ。

然かはあれども、よし君の
今はた其處に在らむとも
君が眼をよろこばす
オイフロジィネは立ち出でじ。
戀する人の懊惱をば
さはがり夙く描させし、
希望ありける敎子の
聲は聞かじな、今はしも。

人は來りて人はゆく、
君の心に適ふべき
人はまたしもいでゝ來む。

大いなる才有つものに
つぎて來らむ、更になほ
大いなる才抱くもの。

われをば、さはれ、な忘れそ、
煩はしかる御務に
いそしむ君に、笑顏もて
立ち向ひつゝ、敎へます
御言のまゝに身を任せ、
君が微笑にうれしびて
君の定むる役をしも
よろこぶ少女あらむとき、

疲れつとめも厭ひなく
力のかぎり奥津城の
門にゆかむまで努めつゝ
犠牲をよろこび捧ぐなる
少女の若しもあらむとき、
あゝ君われをしのべかし、
呼びね、ふたゝび、「オイフロジィネ
またわが前に現はれぬ」と。

かず〳〵なほも告げましと
思へど、あはれ、逝くものは

思ふがまゝにとゞまりて
えもあられぬをいかにせむ、
此の身の上を司る
厳しき神のいますをや。
さらば！いざ君、あはれはや
雲は揺ぎてわれをしも
かの世へ急きぞ追ひたつる。
一つの望み希くは
情に聞くを許せかし。

むなしく何の名誉もなくて
陰府にはわれな落しそよ、

美の神ぞ唯亡き人に
二世の命を授くとや。
げに詩人に頌がれずば
身は名もあらぬ影のみと
ペルゼフォオネのかの國を
區別もわかず蠢めけど、
名を詩人に頌がれしは
ひとりわかれて姿もち、
有りとあらゆる秀れ人の
合唱に聲をも合はされむ。
御歌に歌ひ賜はらば
われはも行かん、よろこびて。

女神もいとど情ある
目にこそわれを見給はめ。
女神やさしくわれ迎へ
我をぞ呼ばむ。いと近く
王位の前に立てるてふ
高く尊きをみなだち
やさしく我れを見給はむ。
操正しき人妻の
ペネロパイアは我れよばむ、
オイアドネも亦其の愛づる
夫の胸にもたれつゝ。
あまりに早く逝きにたる

若きは我れにちかづきて
共に等しき運命嘆かむ。
兄に眞心のいと深かりし
かのアンチゴネ、許嫁の身もて、
死にしを今もなほかなしむ
ポリイクセナの若しも來らば
けだかく我れはたちむかひて
二人をこそは姉妹とせめ。
彼等はげにも悲劇てふ
藝術の生みしものなれば
詩人我れをも歌ひ賜はゞ、
其の歌、あゝげに、我が有りし世に

えもなさざりしを我れにはとげむ。
オイフロジィネはかく言ひて、
なほかたらむと其の愛しき
口うごかせど聲は亂れぬ。
なびき漂ふ紫雲より
ヘルメスの神悠々と
あらはれいでつゝ杖あげて
示しのらせば、二つの姿
渦きのぼる雲にのまれぬ。
夜はいたくもふけ度りて

あらぶる急瀨はいよよはげしく
滑る細路に沿ひてさかまく。
抑へがたなき悲哀に
悲嘆に我れは力盡き、
苔なめらかなる岩が根に
はつかに轉ぶさゝへつゝ、
胸の小琴は憂愁にやれて
涙にくるゝそのひまに、
あはれ野もせをほのぐと
曙はやう白みわたりぬ。

譚歌

怜　入

『城門の前に聞ゆるは何？
軍橋の前に響くは何ぞ？
こゝなる廣間のわれらが耳に
歌の反響をかへさせよ。』
王かくのらせば侍童走れり。
侍童來りぬ、王は叫べり、
『進ましめよや、その老人。』

「いやこそ申せ、貴なる君達、
麗はし上臈、いや申しまつる。
榮ゆる御空よ、列べる明星、
誰か御名を辨へ「知らむや。
華麗、壯嚴、あふるゝ御堂に、
閉ぢね、眼よ、愕き喜び
眺めてあるべき時にはあらじを。」
伶人眼をおし鎖しつゝ
聲色の限りに琴彈きいでたり。
武士は勇んで打眺めつ、

佳人は膝に頭を垂れぬ。
その歌王の心に適ひ
技の光榮をば彰はさむとて
黄金の鎖を持來らせぬ。
「われには授けな、黄金の鎖を。
奮然勇んで馳せも向へば、
敵の槍は碎けて飛び散る
その武夫に鎖を與へよ。
與へよ、王座に仕ふる大臣に、
重荷になほしも黄金の重荷を
加へて大臣に負はしめよかし。

われは梢に宿かる鳥の
歌ふが如くに歌ひけるのみ。
咽喉を漲ぎりいづる歌こそ
尊き報いの賜物なるをや。
さはれ、乞はれば、我れは乞はなむ
純なる黄金の盃もて
美き酒こそ我れには賜へ。」

盃手にして伶人のみぬ。
「憂をはらふや、あゝ美き酒、
賜びて賜ぶとも思ひたらざる

高き幸ある家よ、榮えよ、
榮えゆきなばわれ偲びたまへ、
この盃にわが謝すごとく
眞心よりして神に謝しませ。」

トゥウレの王

むかしトゥウレに王ありき、
死ぬまで操かへざりし
戀しの妻は臨終に
與へき、黄金の盃を。
こよなく夫れを愛惜み

宴ごとにぞ傾けし。
そを傾くるたびごとに
王は涙をながしにき。

命の際に其の國の
市を數へて、物みなを
嗣子に惠み與へけり、
盃のみは止めつゝ。

王は張りけり、盛宴を、
もののふどもに圍まれて
こゝ海岸の城の上

御祖の高き客堂に。

わが老酒客そこに立ち
知死期の火焔のみほして、
投ちにけり、波の中に
その聖らなる盃を。

王は眺めぬ、轉び落ら
水を掬ひて沈むをば。
見る眼をやがて沈ませつ、
復一滴も飲まざりき。

魔王

夜ぶかき暴風を騎り行くは誰ぞ。
それぞ父と子。
父はその子を腕にまきて
しかと抱きてかつ暖めつ。
『わが子よ、などさは哀しげに面かくすぞ。』
「見ずや、父上、魔の王を
冠かむりて裾曳く魔王を。」
『わが子よ、そは唯狹霧にぞある。』

（好き子ぞ、いざ來よ、吾れと共に
おかしき遊戯汝とこそせめ。
渚にさま〳〵美しき花あり、
わが母かず〳〵美き衣もてれば。）
「父上、父上、御身は聞かずや、
魔王のわれに呼く言葉を。」
『安かれ、わが子よ、心安かれ、
枯れたる木の葉に戰く風ぞや。』
（美き見ぞ、われと共に行かずや、

わが女等やさしく汝を待たむ。
わが女等夜の舞にいざなひ、
舞ひつ、歌ひつ、伽をばせむに。)

「父上、父上、見えずや、かしこ
淋しきところに魔王の姫達。」
『わが子よ、〳〵、われ能く見つるに、
いたくも古りたる老樹の柳ぞ。』

(愛らしの子や、美しき姿ぞ、われを
やさしからずば、力もちゐむ。)

「父上、父上、あれ、摑まるる！
魔王ぞわれをば惱ましつるよ。」

怖れ慄き父は急ぎぬ、
呻くその兒を胸に抱きて、
艱み疲れて家につけるに、
腕にその子は死にてぞありける。

漁夫

海はとよめき、海漲ぎりぬ。
一人の漁夫岸邊に座して、
しづかに泛子をは打成りつゝ、

冷氣そゞろに心に泌みぬ。
かくて座しつゝ窺ひをれば、
潮たちまち湧立ち分れて、
亂るゝ波間に蠢然とばかり
濡身の女ぞとよもし出でたる。

歌うたひつつ且つ語りぬ。
『などわが血潮を命無き
火には誘ひ釣上ぐる、
人の智恵もて奸計もて。
水底深くあればこそ
魚幸あれと君知るや、

そのまゝ君も沈みなば、
初めて心快からむに。

海にしてこそ美しき太陽も、
月も心をはらしつゝ、
波に面を洗へばぞ、
いや清らには還らずや。
ぬれて澄みつる紺青の
此の空心惹かざるか。
久遠の露に宿りたる
君が面に惹かれずや。』

海はとよめき海みなぎりて、
漁夫が素足濡したり。
戀しき人に逢へるが如く
胸ぞ漫ろにあこがれいでつる。
女語りつ、歌うたひつ、
斯くてぞ男が命は盡きぬる。
かつ惹かれつゝかつ沈みて
再び漁夫は見られざりけり。

骸骨の舞

塔守、眞夜中、立ならぶ
數のおくつき瞰下しぬ。

月は物みな輝かしつ、
墓塲白盡と照り渡る。
只見ればつぎ〳〵塚は搖いで
現れいでたり、男女
眞白き衣の裾を曳きつゝ。

たちまち喜び興ぜむとて
手に手をとりつゝ圈を描き、
鎖と連る、まつしきも、
富めるも、老いも、幼きも。
されども長裾舞さまたぐるに、
此處に耻づべき人もあらねば、

皆ぬぎすてたり、その衣は
小山の上にぞ散りて亂るゝ。

見よ、脛躍りつ、脚よろめきつ、
奇しく可笑しき舞ひはじまりぬ。
木切に叩く調子につれて、
ぎし〳〵ごつ〳〵骨鳴り踊る。
塔守可笑しさ耐へかねつつも
たわむれ心ぞふと起りける。
「よし、〳〵、一つの衣かくさむ。」
衣かくして聖なる扉の

後に急ぎて遁れて入りぬ。
月なほ明るく舞ひを照すに、
踊りてめぐりぬ、ものすさまじく。
されども遂に月かくるれば、
つぎ〳〵衣きて、ひそめき來りつ、
見よ、早や芝生の上に出でたる。

殘れる一人は足もしどろに
墓をさがしぬ、そこかしこ。
さは憂き戯れする友あらじ。
空にその衣噂ぎ出しつつ、
塔の扉を搖がしつれど、

塔守る彼には幸ひなるかな、
聖めし扉は開きもやらず、
この亡き人をば突き返したり。
扉は黄金の十字に光りき。

衣もたずば胸やすらかぬに、
考へためらふ間もあらばこそ、
死靈やにはに軒を摑んで、
一段一段よぢ上りぬ。
塔守、あはれや、命の瀬戸際！
死靈飛び來る、螺線の飾を、
さながら長脚蛛蜘の如くに。

塔守蒼ざめ、顫ひて、
衣かへさむと思ひつれども——
かなしや、今こそ、つくる命か——
裳の釘にかゝれるをいかに。
光うすれて、吁、月くもりつ、
丑三の鐘すごくとゞろき、
下なる骸骨くだけて消えけり。

麗はしき花

（捕はれの伯の歌）

伯

美くしき花われは知る、

花にぞかくる、わが望み。
たづね行かむと思へども、
捕はれの身をいかにせむ。
わが惱みこそ輕からね。
わが自由なりしそのかみは
花も側へにありしをや。

周圍嶮しき城にして
目こそ彷徨へ、いたづらに。
高かる塔の上なれば、
見れど見られず、その花は。
その花われにおくるもの

下郎、ものしふ、誰なりとも
長く身に着む、その情。

薔薇

美しくも咲けるわれぞ聞く、
ここ汝が窓の下にして。
君の思ふこそ、われ、薔薇。
あはれ、たうとき武夫よ、
汝れに氣高き情思あり、
さばこそ、げにも百花の
女王しもいませ、汝が胸に。

伯

緑の衣纏ひつる

ながの紫の匂はしさ。
さばぞ少女は汝を望む、
黄金眞玉をのぞむごと。
汝れが花環は美き顔を
いや麗しく飾れども、
ひそかに我れの崇むるは
汝れにあらぬを如何にせむ。

百合

薔薇の性質はほこりかに
ひとへに上を望めども、
眞白き百合の簪ぞ
やさしき人は讃へなむ。

眞心もてる人ならば、
わがごと心清からば、
われこそ愛でめ、いとふかく。

伯

われは正しく清らかに
罪を犯しし身ならねど、
此處にぞわれはつながれて
ひとり惱むよ、寂しくも。
汝れはやさしく清らけき
少女姿の美しけれど、
猶ほ愛でたきを我ぞ知る。

石竹

それぞ石竹、衛士が家の
此處なる庭に咲ける我れ。
老人われをいとふかく
撈はりつゝも待つものを。
美くしき圏に葉は萠えて
命のがきり香ぐはしく
色も匂ふよ、千よろづに。

伯　人は石竹輕蔑しめじ。
庭つくり師はよろこびて
あるは日影にいだしつゝ
あるひは防ぐ日の光。

されども我のよろこぶは
汝が數へたる光榮ならず。
しづけき花よ、それぞたゞ。

菫　われは隱れて俯向きて
好みて物も言はねども、
今し言ふべき時なれば、
深き沈默をやぶりなむ。
我れ、夫れならば、よき人よ、
わが有りとある薫りをば
捧げえぬこそ哀しけれ。

伯

やさしき薫われは愛づ、
かくしとやかに薫りさへ
かく美はしく匂へども、
憂かるこの身の惱みには、
猶ほ良きをこそ望むなれ。
たゞ御身等にわれ告げむ、
かかるいぶせき岩根には
えもこそあらね、わが花は。

かしこ小河の河縁を
忠實なる妻ぞひとり迷ふ、
わが捕繫のとくるまで。

太息つきつゝいくそたび
蒼き草花手折りては
妻こそは言へ、「忘るな！」と。
かくぞ覺ゆる、離りても。

げに離りても眞心に
二人おもへば力あり。
囹圄の夜もかくてこそ
今なほわれは生きてあれ。
胸裂くるかと思ふ時
たゞ『忘るな！』とわれ呼べば
生きこそかへれ、われはふたゝび。

コリントの花嫁

アテンの市よりひとりの若人
未だよう知らぬコリントに來りぬ。
そこなる市人におのを薦めむとてなり。
親と親とは親しき友の交らひありて、
はやう昔より
娘と息とを
嫁よ婿よと言ひ習はしき。

さはれ、あたひ貴とき犧牲さゝげずして

よく歡び迎へらるべしや。
若人はなほその眷族とても異教徒なるに、
嫁が家は早う基督教徒となりて洗禮を受けたり。

信仰新たに芽ぐむ時
ともすれど愛と信とは
醜草の如く苅りて去らるゝ例なるをや。

花嫁が家は早う靜かに打眠れり。
父も娘達も臥床に入りぬ。起きゐたるは唯母のみ。

母はいとまめやかに客人を出で迎へ
直ちに美はしき座敷に案内しぬ。
願はざるに
美酒佳肴清らにとゝのひ
さま〳〵歡待しつゝ母はさらばとて立
去れり。

されど美げなる酒も肴も
若人は食うべむ心もいでず、
疲れに餓ゑも渴きも忘れはてゝ、
着のまゝに臥床に横はりぬ。
今し目とろまむずる折しもあれ

怪しき人かげ
戸をしひらきて現はれ來れり。

見やる仄暗き燈火の下
眞白き衣に被衣つけたる少女ひとり
額に黄金の條ある黑き飾布を結べるが
しとやかに進み入りつ。
男を見るや
つと飛び退きて、
愕きて眞白き手をぞ擧げたる。

少女は叫べり、『客人ありとも知らさら

さばかり此家に疎ぜらるゝや。
あはれ、妾をば御寺の隅に、此の我をんまで、
思へば、げにも羞かしや。しも閉籠めけるを！
寝ね給へ、そのまゝに、
臥床の中に。
妾は急ぎ去らん、來しやうに。』
『待ち給へ、美しの少女、』呼びつゝ男
は忽ち臥床を飛起きたり。
『爰に珍味あり、佳肴あり、

君こそ我れに愛をもたらせ。
怖ぢてや蒼醒めつる？
可憐君、來よかし、いざ、
いざや二人して神々の祝福を受けん。』
『寄らせな、君、止まり給へ、
現世の歡樂享らるゝ妾ならず。
やさしの母がはかなき妄想より、
早やう今はの暇告げゝるなり。
病の平癒祈らむとて母は誓ひき、
若き命と心とを
捧げて天國に仕へしめむと。

『いにしへ神の大衆は
やがて此平和けき家を去り給ひ、
御空にひとりの目には見えぬ
救主は十字架にして崇められ、
此市にして犧牲と滅ぶるは、
羊にあらず牛にもあらず、
未曾有のことや、人の犧牲。』

つぶさに少女の語るを聞きて
若人はわれに問ひ、われと思ひぬ、
夢か現か、しづけき此室に

懐かしの許嫁、今まのあたり立たむとは。
『たゞわが妻となり給へ、
二人が父と父は誓ひて、
御空の祝福をば祈り給ひき。』
『やさしの君や、妾は君がものならじよ！
君は妹にと定められしを。
さびしの小家に妾ひとり嘆くを知らば、
あはれ、妹が腕にまかるゝ時、しのび
給へ、君、

たゞ君懷ふ妾をば、
焦れ悶ふる妾をば。』
言ひつゝ地に隱れんとす。

『いな、此火焔にかけて誓はむ。
結ぶの神のやさしくも、瑞兆あらはす
焔ぞや。
汝れ歡樂を享得ずて、わが妻ならぬ身
なりとも、
來よ、わが父がり我れと共に。
戀しの人よ止まれかし、
祝へ、直ちに我と共に

思ひもうけぬ婚姻のうたげ。』

二人は互に固めの印を取り換しぬ。
少女は黃金の鎖を贈り、
男は二なき白銀の妙に刻める盃を
とりて少女に與ふれば、
『妾には相應しからじ、
乞ふらくは、君、君が御髮の一筋の毛
われに賜びてよ、を。』

そよや、逢ふ魔が時の鐘こそなれ。

忽ち少女は時を得がほに、
蒼白き其口渇きたらむやう
血の色濁れる酒をば仰ぐ。
されども物は
若人親しくすゝむれど
採らむともせざりけり。

少女若人に盃させば
若人も嬉しびて、一息に飲干しぬ。
人目もなき宴げのなかば、青年は愛情を乞ひぬ。
あはれ、心は戀に悶えけるなり。

少女は拒みぬ、
乞へど願へど効なくて、
遂に臥床に泣倒れぬ。

少女立寄りてひたと其身を投寄せつ、
『あはれ、御嘆き、妾も悲しとは見つれども、
かひなしや、この身に觸れまさば
包みまつりしを、覺りて君は戰かむ。
雪とこそ白けれど、
氷なす冷やかさ、
君選りましゝ可憐少女は。』

若き心は戀に勇みて、
少女を犇と双腕に抱きつ、
『よし、汝、塚より出で來つとも、
暖まれかし、わが胸に！
かはす息、接くる唇！
愛の溢れぞ！
あはれ、燃えずや、燃ゆる此身をおぼえずや。』

ひし〳〵と愛は二人を抱かせぬ、
嬉しさのあまる涙を泣きかはしつゝ

互におのれを忘れはてゝ、
少女は吸ひぬ、ひたぶるに男の口の焔をば。
男の戀の物ぐるひ
凝りし血潮沸かせども、
少女が心臓は打たざりし。

かゝる間を母は家の内看戍らむと
夜深きに猶ほ廊下を忍び來りつ、
戸に寄りて耳側立つる、怪しの物の音、
何ならんと良久時立聞けば、
花婿と花嫁の

憂へ歎ぶさゞめごと、
すゞろ口籠る戯の戯言。

先づその證據母は求むと、
身轉かず外に佇立めば、
腹立しや、聞ゆるは愛の誓詞
媚び睦むかねごとの數。
『な言ひそ、鷄さめんに。』
『さはれ明日の夜も
また來んや。』且つ接吻のあまたゝび。
母は怒りに堪えかねて、

かねて知る錠やには問きつ。
『たちまちに身を外人に任すやうなる
さる遊女この家に在りや。』
叫びつゝ内に入りぬ。
灯火の下にして
見やれば——おぞや、わが子なりけり。
はと若人は愕きて
少女が着たる被衣もて
毛氈もて戀人を蔽はんとす。
さはれ、少女はわれと搔退け出でつ。
化生の力の籠れるやう、

姿は高く徐々と
臥床の上に伸びぞあがれる。

『母上、々々、』言ふ聲もうつろ、
『嬉しかる夜を妨げ給ふか。
暖かき地より逐退け給ふか。
唯悶えむとて妾や覺めし。
あはれ、斯くても飽き給はずや、
死出の衣に奥津城に
早う此身を埋めても猶ほ。
さもあれ、重く蓋へる塚より

自然の裁斷ぞ我をしも逐へる。
御身等が聖僧達の唱ふなる
歌も祈禱も効こそなけれ。
若き心の燃ゆるところ
水も鹽もいかて冷さむ。
あはれ、地だに戀は冷さじ。

はれやかなるヴェヌスの御寺、猶立ち
この君妾にと契られき。
さはれ、外國僞の誓ひに御身は惑はされて

し其昔、

母上、御身は言葉破りつ。
わが子の契を妨ぐと、
母いかばかり祈るとも、
いづこの神か聽きまさんや。

塚よりぞわれは逐はれつる、
消えし幸福もとめよと、
失へる夫愛でよとて
そが胸の血を吸へよとて。
彼れ死なば、いで、
そよの男子に往かむ。
亂れ心に世の若人はみな亡びむ。

美し男よ、命はあらじ、
今や汝れこの世に病まむ。
わが鎖汝れにおくりて
ながら髪を我は切りたり。
心して見よ、
あしたに老いむ。
唯あの世にしてぞ復た、黒髪の人と現
はれん。

聞きね、母、最後の願ひ、
眞木焚木積み重ねつゝ

開け、わがせばき柩(ひつぎ)
戀人を焔の中に休ませよ。
火花ちるとき、
灰燃ゆるとき、
われらは古き神に急がん。』

（完）

明治三十八年五月三十日印刷
明治三十八年六月一日發行

（定價金四拾五錢）

著作者　橋本忠夫
發行者　東京市牛込區新小川町一丁目十三番地　中根駒十郎
印刷者　東京市京橋區宗十郎町十五番地　山口竹二郎

合資會社東京國文社印刷

發行所　東京牛込區新小川町一丁目十三番地　新潮社

複製を許さず

T2250

小詩國

金子薫園君著
和田英作君畫
岡田三郎助君畫

（第四版）
體裁最優麗
定價廿五錢
郵税四錢

新派歌集

▲新派歌壇に於ける薫園氏の位置は何人も知る所、こに云ふを須ゐず、其作詩彩高麗、秀艶花の如し、人皆諷誦して萬斛の奇香に醉ふ▲『小詩國』は氏が最近二三年來の作中の萃を拔けるものにして、所掲數百首、氏によりて獨り見るべき清新高雅の趣は、遺憾なく此集中に窺ふことを得べし▲附錄に『小紅集』あり、是れ著者の令妹英子女史の作を錄せるもの也。謙抑、名を售らざる此女詩人の作の、いかに纖麗幽婉なるかを看よ

『小詩國』批評一斑

▲金子薫園氏が近作歌集なり。詞意平明にして、詩味豐饒、娟秀溫雅の趣致、一巻を蔽うて、人をして煦々たる春光に醉はしむ。……（中學世界）

▲薫園子の詩、溫雅にして華麗、夙に清新なる叙景詩を以て著はる。頃者好んで主觀的の作を試むと雖も、そは概ね自然を對象とせる主觀にして、其情想趣致共に清華なるは、著者の獨壇とする所也。……（讀賣新聞）

▲作者の詩境は直に其身邊に在る、即ち趣を持つもの興を惹くもの、天上でも地下でも戀愛でもなく、居常親しく眼に觸れ耳に聞えてあるもの、作者はそれ等盡くを其情に溫めて清楚溫藉の詩に孵してゐる。……（電報新聞）

▲著者、別に清新一家の調を成せるは、本書の和歌に於いて是を看取するに難からず、孰れも興たかき新詩の風韻あり……（二六新聞）

▲天にはミューズの神、地にはさうびの花、うちに萬斛の情感をこめて小詩國は現れたり。著者は濃艶の歌人いはば繪畫的詩人也。然も猶之に飽足らずして樂的要素を加味せんとする傾向の見ゆるはうれし。……（音樂新報）

▲薫園氏の作、優艶にして高麗溫雅の風を交へて越味掬すべきものあり、歌を學ぶもの一本を備ぶべき也。……女子の友）

▲字々皆鎔錬せられ句々悉く節奏あり、紆餘婉微の趣に富みて、露骨ならず平板ならず、詩としては最早これ以上の形式の美は見ることが出來まいと思はれる。……（青年議會）

▲薫園氏の和歌に就いては、世おのづから定評あらんが、思ふに清楚にして優婉せまらざるは其特色なるべし。……（國文學）

▲薫園子の小詩國の公にせられたのは、詩壇の慶事たるは固より、年初和歌を學ぶ人にとりては、眞に此上もない幸福であらうと思ふ……（新國民）

▲清麗の風致掬すべきものあるは、讀者と共に喜ぶ所……附錄令妹英子女史の作數十首優雅の景情見るべき作尠からず……（白百合）

銀鈴

文學士　尾上柴舟君著

（四版）

本文色刷、長方形頗美本
定價貳拾五錢　郵稅貳錢

新派歌集

▲聲調穩悽にして情韻雙佳、中に高渾の氣力あるものは尾上柴舟氏の作也。▲西詩の眞髓に徹して直ちに其清新の趣味を融會し得るものは、今の歌人中只一人の柴舟氏あるのみ。▲柴舟氏の作は眞に是れ崑山の珠玉、片々尚ほ尚ぶ可し。『銀鈴』は其會心の短歌數百首に添ふるに、獨創の四行詩と、流麗稀に看るの新體詩約十篇を以てせるもの、▲啻に新派和歌の研鑽に從ふ人のみならず、一般文藝に興味を有する人の絶好侶伴也。

『銀鈴』批評一斑

▲温雅流麗の格調を有するは、柴舟の詩也。『銀鈴』は彼が得意の短歌新體詩を輯めたるもの、何れも再錦に値すべし。……（萬朝報）

▲雄渾なるもの、清華なるもの、豪放なるもの、高雅なるもの、恣態此一卷に錯綜して、趣味頗る饒かなり。……（讀賣新聞）

▲柴舟氏の歌は常に清鮮の趣に富む、若緑葉の露滴る森の曙の如しとや云はむ。敢て好詩集として世に推薦す……（帝國文學）

▲銀鈴と云ふ表題最もよく此書の内容を現はしたり其聲調の斬新にして着想の奇拔なる方今稀に見るの良詩集なり……（女學世界）

▲氏の詩實に可憐、靜孱、たとへば風蘭の風なきにゆるゝが如し、『銀鈴』の名蓋し其詩をあらはして餘すなし……（白百合）

▲さすがに古歌に通曉せる著者のことゝて、其の詠概ね佳なるは固より、最も摯實の氣に富めるは嬉し……（活動の日本）

▲柴舟氏の作、穩健にして清新、流暢にして華麗、その用語の自在にして斧削の痕跡をとどめざるは、今の歌壇、多くその比を見ざる所也。……（國文學）

▲聲調流麗にして軟弱に流れざるは推稱に値すと云ふべし、巻中最も見るべきは戰爭を詩題とせるもの也。……（電報新聞）

▲著者の和歌は世己に定評あり新體詩亦輕妙也、朗々これを誦せんには銀鈴の鏘然たる響を自ら聞かん。……（京都日出新聞）

▲西歐の新趣味あつて而も敢へて氣取らず高ぶらず著者の氣品高きを見る…正しく和歌壇上美しく咲ける一本の名花に譬ふべし……（中央公論）

▲この御集を拜見して、ます〳〵いちはやに進み給へる君のわれらが爲に示し給へるたふとき道の栞とありがたく忝く存じ候。（明星）

▲此一巻は歌集中最も價値ある者にして近時文藝界の珍也、年少和歌に志ある人は就て學ぶべし銀鈴は容易に得難き模範也。……（國民中學會講義錄）

幻影

萬朝報記者　田口掬汀君著

（再版出來）　紙數三百頁餘　定價四拾錢　體裁最も優美　郵稅金六錢

▲近時小説家として聲名嘖々たる掬汀君の短篇小説集也。何れも構想純潔、着想清新の佳作。いかなる人も之を讀んで興趣を感ずべし

▲幻影は小説の外、著者苦心の餘になれる美文、寫生文、評論文を輯めたる大文集也。新時代の文章を學ぶ人には、眞に絶好の模範也

本書の價値は左の批評に看よ、今回再版印刷出來せり。

◎電報新聞評

幻影は主として短篇小説を輯めたるもの也、短篇と云ふと雖も、いづれも三十頁に近きものにて、著者苦心の餘に成れるものゝ如し。著者の作の特色とする所は、道德美を描いて興趣湧くが如きに在り。本書は、熱烈なる戀愛を寫せるもの、青年の不撓不屈の意氣を描けるもの、平和なる村夫子を主人公にせるもの等、各編皆純潔にして清新、本書も亦よく家庭小説として江湖の歡迎を受くることを得ん乎。附錄、美文、寫生文、皆著者得意の蕭散且つ洒脫の文字也。評論文の精嚴にして縱横なる、論文家としての著者の面目を窺ふことを得べし

◎報知新聞評

掬汀子が作の短篇小説、片瀨川、まぼろし、密獵船、島の先生、小車草紙、漁村の騷動等雜文孤棲雜記及び評論文數十篇を合刷して一冊とせしもの、例のイヤミなきスラリとした間に氣力あり韻致ある筆、これを讀みて感興多し、附錄のもでる論食堂論など常識より成る意見ながらどこか奇警に讀るゝところ著者が想と筆の清新に據る

◎毎日新聞評

田口掬汀子の小説、美文、評論を集めて一卷となしたるものなり、收むる所「片瀨川」の趣味多き「まぼろし」の美しき、「密獵船」の壯快なる、「孤棲雜記」の長閑なる、其の評論には美術論あり、文藝論あり、演劇改良論ありて、偶以て著者の多方面を見るに足れり、

◎神戸新聞評

三百餘頁の中趣味汪溢讀んで面白かちざるはなく、一度卷を繙けば春風駘蕩の裡にあるやうである。要するに掬汀子は教訓的小説を描いて、成功の途に近づいたものと言はねばならぬ。而して氏の文章の穩健で、形容に巧みなるは、世既に定評あれば、今更言ふまでもない。特に本書の表紙の脫俗なるは、吾人の多とする所である。

◎中國民報評

氏が清絶双びなき筆になれる作を集めたるもの、小説あり論文あり

文學雜誌

新潮

第二卷
第六號
五月十日發刊
毎月一回十日發行
定價拾貳錢郵税一錢
六冊郵税共七拾貳錢
郵券代用一割增の事

▲『新潮』は、伊藤銀月、田口掬汀、金子薫園、松居松葉、佐藤紅緑登阪北嶺、佐藤橘香の諸氏主として筆を執らるゝ文學雜誌なり。

▲『新潮』の掲ぐる所は、熱烈奔放、直論諱むなき評論及び人物月旦、情趣饒かなる小説、美文、韻文。奇警人の意表に出づる雜録等也。

▲『新潮』は紙面の大半を開放して青年文士の馳騁に任す、評論、小説、美文皆可、和歌また最も歡迎する所也、乞ふ奮うて寄稿あれ。

▲『新潮』の短歌は、新派歌壇の雄鎭金子薫園子選評に當られ、現時韻文界の一勢力たらんとす。『銀鈴』の著者又毎號新作を寄せらる。

Tralliamus" も其參考に供されたらうといふことだ. 話の畧筋を言へば, Athen の一青年と Korinth の一少女が曾て許婚の約束が有つたが, 花嫁の家では今までの希臘固有の多神教を棄てゝ, 新らたに勢力を得て來た基督教徒となり, 其母の迷信から信仰の印に其少女を犧牲 (謂ゆる Christ の Braut) に捧げて了つた; 而して其死んで了つた跡へ, 夫れとも知らずに彼の青年が來て泊る; 其晩少女の幽靈が出て, 遂に其青年の命を奪つて彼の世へ連れて行つて了ふ.

2. dort noch unbekannt —— Korinth の事情を未だ知らぬ. 9. teuer nicht die Gunst erkauft —— 許婚の約束したといふばかりで, 若し夫れ以上の恩惠を施さないでは, 果してよく婿かねとして歡迎されるだらうか, 何とならば……. 22. bei —— trotz の義. 25. daß —— so daß. 35. weiße —— わざわざ 白い といふのは, 其死靈たるを仄めかす爲. 38. Klause —— kleines Haus in einem Kloster. = Grab. 44. Rafft —— indem er …… rafft. 45. Ceres'—— Ceres' Gabe; ギリシヤの菓物 (食物) の神; —— Bacchus —— 酒の神. 46. Amor —— 愛の神 (卽ち愛情). 49. Götter —— 希臘の諸神. 51. nicht den Freuden —— 此世の快樂を享けられぬものだ, 死んだのだから. 52. der letzte Schritt —— 此世より彼の世へ逝く最後の歩. 卽ち死んだこと. 55. Jugend und Natur —— 若い命と人の天性, 愛に燃ゆる少女を强ひて犧牲に供すのは, 其天性にそむくから. 56. dem Himmel —— Gott (但し耶蘇教の). 59. Einer —— ein und derselbe Gott, (卽ち耶蘇教の神). 60. ein Heiland —— Christ. 74. ihren —— meiner 2. Schwester. 79. Hymen —— 婚禮の神. sie — Flamme. 85. sie —— 男と幽靈. 86. Golden …… die Kette —— die gegoldete Kette. — 少女は己れの死んだものだといふことも忘れて了つて固めの印を贈る. 88. Silbern, kunstlich —— eine silberne, künsterlich gearbeitete Schale.—— wie nicht eine war —— solch eine Schale, als es keine kostbarere

gab. 88. Die —— die Schale. 91. eine Locke —— 男と己れ (少女) とを結びつけんとして, 且つ死の神が死ぬと定つた人がある時は其髪の毛を切つて冥府に送るといふ話があるから, それで, Locke を欲しいといふ. 92. Geisterstunde —— これから幽靈の世界にならうといふ時 (丑三). 101. Liebe —— Kuß u. s. w. 108. berührst…… weil sie tot ist. 120. Liebe —— Amor. 138. „Still ……" —— 幽靈の詞. 139—140—男の詞. 144. zu Willen sind —— 男に身を (Fleischverkehr に) 任せる. 164. Eurer Priester —— 基督教の僧. 166. Salz und Wasser —— 舊教では之を神聖な汚れを拂ふものとしてゐる. 170. Venus' —— genit.; Rom の Schönheit と Liebe の神 (ギリシヤの Aphrodite); 殊に sinnliche Liebe の義に用ひられる. ギリシヤ人は謂ゆる本能主義 (善意の) であつたから, 詩人は茲に Venus をかりて, ギリシヤ教を代表させたのである. 173. Fremd —— 基督教. 182. das junge Volk —— 青年全體をさしていふ. 183—189— 其許嫁の夫に向つていふ詞. 192. Hütte —— Grab. 193. Liebende —— diesen Jüngling. 196. alten Göttern —— griechischen Göttern.

—— 完 ——

正誤

譯詩第五三頁第三行、「泣をしめよ」は「泣かしめよ」の誤。

同第五四頁第六行、「天使のごとく」は「眼(まなこ)のごとく」の誤。

glut —— 日の照る陸の上に釣上げる. 15. wie du bist —— unverzüglich und unbedenklich. 16. erst gesund —— erst wahrhaft gesund. 19. ihr —— der Sonne und des Mondes. Kehrt ... her —— 月日の一度海に沈んで翌日再び出て來るのをいふ. wellenatmend —— 月も日も波で顔を洗つて,波に息をついて.
20. doppelt —— 一段と美くしく. 24. ew'gen Tau —— 此のいつまでもある甘露の水浴.

Der Totentanz.

1813, 夏に成る. Goethe は二つの違つた說話(Sage)を聞いて,それを綜合して此詩を作つた; 一つは死人が墓から夜中に出て來て舞ふといふ話; 一つは塔守が夜な夜なさまよひ歩く死人の衣を執つたれば, 其幽靈が塔守を追かけたといふ話.

1. Der Türmer, der schaut —— der は relativ に用ひたのでは無いに der Türmer schaut といふに等しい; (3) der Mond, der —— (4) der Kirchhef —— 等の例の如し.
8. Das —— es と共に死人全體を指して言ふ. 9. zur Runde —— 一組二人づゝ腕を組んで圓形に踊るのをいふ. zum Kranze —— 環のやうに連る舞蹈.
16. Gebärden —— Bewegungen. vertrachte —— 顔などの歪んだ, 可笑しい. 17. Klippert's und Klappert's —— 骸骨共の關節のぎしぎし, こつこつと踊る度に鳴る. —— 死人の事を一名 Klapperbim 又は Klappermann といふのから來た洒落; Klippern は Klappern の後で變つた形,意味は同じ. 18. Hölzlein —— 樂器ノ線を叩く撥.
20. Der Schalk, der Versucher —— 洒落に惡戲をして見やうといふ氣になつた. 21. dir —— Türmer を指す.
23. Getan wie gedacht —— 思つた(盜まうといふ)ことが, 其通り成された, (卽ち盜みおほせた). 24. er —— der Mond.
28. es —— 死人の群. 29. einer —— 衣を盜まれた一人. 31. Geselle —— 死人仲間はそんなひどいわるさはすまい. 34. Geziert —— 十字架が飾られてあるから, 卽ち神聖な門は死人を入れるべきで無いから, 押明けやうとしても, 扉が押もどす. 44. Gern gäb —— 怖いから, もう衣を返へしてやらうとしたけれども, 生憎(45—46)針にひつかゝつておたので返されなかつた.
45. jetzt hat ..... —— 今や取殺されるのかと,身も世もあられぬ思をした. 47. Schon —— 然るに幸ひにして, 己に 月は曇つて, 幽靈の引込むべき一時の鐘が鳴つたので, 幽靈は急にかへつて了つた. それで塔守は 危い命をやつと助つた.

Das Blümlein Wunderschön.

1798, Juni に成つた. 材料は Ägidius Tschudi (1505—1572) の „Chronicon Helveticum" から採つたつて, 夫妻の愛情の威力を示すのが此作の目的である.
8. ringsum steilen —— 周圍嶮しい岩山の上に城が立つてゐる. 10. Turmgeschoß —— 塔の二階.
20. es herrscht —— darum herrscht. 23. grünen Überkleide —— 花の蕚. 29. Brauch —— Gewohnheiten.
34. Und ist sich —— und wer sich bewußt ist, rein zu sein, wie ich, der ..... . 41. rein und mild —— Jungfrau の形容詞. 42. was —— etwas. 45. der Alte —— der Wächter (牢番). 75. ein blaues Blümchen —— 卽ち Vergißmeinicht (忘るな草), 而して der Graf の戀ふるのも亦此花, 否, „忘るな" と呼ぶ其妻である. (83 參照).

Die Braut von Korinth.

此の Goethe の謂ゆる „Vamphrisches Gedicht" (啐血蝙蝠=死靈=の歌) は 1797 に作られたので, 材料は Zeiller の „Theatrum tragicum" から恐らく採つたので, „Phlegon

で無く,臺辭をも含めてゐる. 103. bewegt ..... hevor —— 舞臺に上る. 106. Christiane は Goethe の指導の下に, „Emilia Galotti" の Emilia や „Egmont" の Klärchen などゝ言ふ 戀に惱む女主人公 を演じた;それで斯う言ふ. 109. vergesse —— vergiß.
113. bis zur Pforte des Grabs —— Christiane は其死なんとする前, 病重く, 殆んど危險なのにも拘らず登場した.
123. gestaltlos —— „gestaltete" (125) の反對で, 詩人の頌詞を得ぬものは,陰府では姿もない. Persephoneias ——, 二格,希臘神話では此女が陰府の女王と稱せられてゐる.
130. 王座の次位に立つ婦人は, Homer に讃ぜられた Penelope (131); Euripides に頌された Euadne (132) 及び Polyxena (136); Sophokles に歌はれた Antigone (135) 等である. 136. Polyxena —— は Priamus の娘, Achill の許嫁であつたが, Achill が死んだ後其靈が現はれて彼の世に Polyxena の來らむことを望んだので, Achill の子 Neoptolem の手に Polyxena は殺された. 144. Hermes —— 死の神. 145. deutete —— 今は死の國へ行くべき時であるぞとさし示す.

Balladen.

Der Sänger.

1783, Nov. に成つた. 1795 には „Wilhelm Meisters Lehrjahre" の中に加へて印刷され, 後に少し改めて Ballade の中に入れた. „W. M. L." の中では, かの老 Harfenspieler (同名の情詩參照) が歌ふことになつてゐる. (s. 11. Kap. des 2. B.) 此詩は中世紀の Ritter 時代に材料を取つたので, Sänger は卽ち Minnesänger で, 王侯の宮廷等を廻り廻つて歌を唱つたものである.

1. vor dem Tor —— 城門前の壕に架けた軍橋の上に立つてゐるものと見なければならぬ. 4. Im Saale —— 王は大客堂で今しも大饗宴を催うしてゐる.
5. Kam —— zurückkam. 13. Augen —— 伶人自身の眼をゝふ. 34. den besten Becher Weins —— den Becher besten Weins.

Der König in Thule.

„Faust" の中の Gretchen の歌.
1. Thule —— 歐州の西北端に在ると言はるゝ架空の島.
4. gab —— einst gegeben hatte. 7. 亡き妻を思出して. 21. trinken —— 盃の中に水が入ること.
23. täten —— taten の方言, Konj. では無い.

Erlköng.

1782 に公にされた. Erlkönig —— „Elfenlied" (情詩)の註を參照されたい. Elfe (光魔) の中に時々醜い姿の黑魔 (Schwarzelfe) があつて, 長い鼻,禿頭(又は髮の逆立つた頭)を持つた,腹は大きく, 脚は細く,極めて無恰好なのださうで,此は時々人間に惡戲をする; 殊に綺麗な小兒を見ると自分の醜い姿と取換へやうとして拐かすといふ話.
1. Nacht und Wind —— 秋の夜嵐. 7. Schweif —— 長い外套の裾.

Der Fischer.

1779. に現はれた.
8. Ein feuchtes Weib —— 水精女 (die Nixe) が現はれて來たので, Nixe は優麗な姿を持つてゐる. 12. Tages-

Zeus) を憧憬してゐる,と,漸々に雲が舞ひ下つて來るのが,恰も自分を招くと考へて,永遠の愛の其神の胸に抱かれやうとする,其こゝろを歌つたのである.

8. Schöne —— Natur を指して言ふ; Schöne は美人の意にあらず, Schönheit の義. 9. dich —— Frühling. 11. deinem —— Liebesgott (f. 30, 31). 14. Drängen sich —— 寄り集つて,そゞろに憧憬の念を催させる.

18. Ruft —— (es) ruft. drein —— in den „lieblichen Morgenwind." 20. Ich komm' —— Ich komme! と叫んだ時,自分の胸の焦るゝ思ひは滿足するだらうと思つたが,周圍を見渡すと,ちつとも胸の滿足するものも無いのに失望して, ach, wohin? と叫んだのである.

Hinauf und vorwärts.

Aus „Faust." 天上高く此土を照らしつゝ,朝に現はれて夕に隱れる日の御子の,今しも其赫灼たる光輝を收めて,再び沈み行かうとする其壯嚴を仰ぎ見て,詩人の胸はそゞろに憧れいでゝ,此土を去つて高く „永遠の光" の世界に昇り,そこより此日の御子と共に彼方に進んで,現實界を超越した眼を擧げて,地上の物の光榮ある姿,之を支配する不朽の法則を眺め,萬象の因つて以て生るゝ宇宙の本體を達觀して,其無限の甘露の雫を享けむと望んだ. けれども,其(各人の胸におのづから湧く)憧憬の念は,此の世の人には遂に滿足させられないのに思ひ到つて,遂に詩人は暗然として哀しむのであつた.

3. Sie —— Sonne. 7. Ich säh —— 若し翼あらば吾は見られん; 茲に詩人は靈翼をふるつて遙かに高く翔けり行く. 11. dann —— 然らば(天翔けり得ば). erwärmten —— 冷風に暖い水が凝つて霧が立つ.

15 — 20 —— 一旦靈翼高く天上に昇つた詩人は茲に至つて,天を横さまに前へと翔る. 20. Sie entweicht! —— 實際日が沈んで了ふと,幻想亦消えて實在の人となる.

Euphrosyne.

5. des Tages —— der Tageswanderung. 8. dem heiligen Mohn —— 罌粟は眠の神 (Morpheus) に捧げるものだから神聖であると考へられた. 9 — 12: Euphrosyne の現はるゝ光景. 13. staune dem Wunder —— über das Wunder. 17 — 140: 詩人 (17 — 22) と Euphrosyne (13 — 140) の對話. 18. begeisterten —— 美の神と思うてゐた故. gerührte —— かゝる荒原に現れて來た其情に. 20. bedeutend —— mir Andeutungen gebend. 21. Töchtern —— 九人の美の神 (Muse) は Zeus と Mnemosyne の間の娘だといふ.

22. Zeus —— des Zeus. 26. schaudernde —— 死の爲に. 31. zieht ..... in der Ferne auf —— 十萬億土に行く(其前に). 34. Gerüst —— 此世の快樂は芝居の道具立のやうに脆いものであるから.

35 — 62: Shakespeare の戲曲 „King John" 興行の替古の時を思出す. 36. täuschenden Kunst —— 卽ち演劇.

43. Brettergerüste —— Weimar の戲場.

45. Knabe schien ich —— Christiane は „King John" 中の王子 Arthur に扮した. 其敵役の侍臣 Hubert de Burgh には此替古の時 Goethe 自ら之に當つたのであつた. 此 Drama の第四幕第一段に, 此 Hubert が王の命で Arthur の眼をつぶさうとするが, 其無邪氣に許してくれと賴むいぢらしさに感かされて廢めて了ふといふ一段がある; 46 — 48 は其光景を叙したもの. 50 — 52: 第四幕第三段の Arthur が大膽にも城壁を超えて免かれんとしてあくなへ命を落す光景である. 68. Schein —— 死を扮したこと.

73. ewige —— 永しへに流れる. 84. Klaget —— beklaget. 89. mir —— は 90 の am Herzen にかゝる: am meinem Herzen. 99. die rührenden Reden —— 芝居で序幕の前に歌ふ Prolog (序詞), 及び大切の後で歌ふ Epilog (結語) といふものがあるが, Christiane は Goethe の作つた其 Prolog, Epilog をよく唱つた,茲では夫ればかり

22. Schattental, Keine Blume —— 世のはかない歡樂(就中,女)に Mahomet の心惹かれぬ樣. 29. gesellig —— 其友たり臣たらんとして. 36. alten Vater —— 卽ち ew'gen Ozean; Homer は Okeanos (Ozean) を有ゆる神々,チタアネン族の祖先だとした. それで諸水の祖たる海を Goethe は Mahomet 教の神に比した. 39. unser wartet —— wartet, um uns aufzunehmen. 41. Seine Sehnenden —— Ozean の方へ行かむと憧るゝ其の諸川.
45. zum Teiche —— 池沼に入らうとするのを防げる.
49. 本流の支後に告げる詞. 60. Cedernhäuser —— 大船巨舶. Atlas —— 天を双肩に負ふといふ希臘の神族 Titan の一人. 其 Atlas の如く此大河は大船巨舶を載せる. 66. feine Kinder —— 其河の岸に住む人を指す.

Gesang der Geister über den Wassern.

1779, Oktober, Goethe は Lauterbrunnen の飛瀑を觀て此詩を作つた. Heuves 氏の所說に據れば其瀑布は Lauterbrunnen の狹い溪間に聳立つ一峰(高さ 305 m.)の絕壁から落ちるのであるから,其地面に落ちつくまでは散じて無數の眞珠を飛ばし,宛ら輝く雨のやう; 殊に日の出頃か月夜には其に映つた光線が幽靈のやうに見えるといふ.
29. Buhler —— Shakespeare は Othello etc. で風を波の戀人(波を戀ふる人)と言つてゐる.

Prometheus.

1774 に作られた. Prometheus は Griechische Mythologei では人間の創造者となつてゐる. Goethe は神話研鑽の餘,此 Prometheus を藉りて,人は已が力あるを自覺してゐと共に(卽ち意志の自由)他面に於ては制限されて居る(卽ち運命に

支配されて居る)といふことを之に寫したのである. 此若き神族の有力者が Titan 族の手から救はれたこと,天上から火種を盜んだこと,及粘土から人間を造つたといふことは,其儘神話から執つた話だが Prometheus を土地の支配者として,天の大神 Zeus の勢力が地には及ばぬとしたのは Goethe の創意で,Mythus には無い. 而して全體は Prometheus が Zeus を罵る詞になつてゐる.
2. Wolkendunst —— 果敢ない 雲烟の上に座つて威張つてゐるが可い. 9. Herd —— 俺が盜んで來た火を置く竈.
15. Opfersteuern —— 罰として課すものであるから, 極めて稀れに神々は受取るばかり. 16. Gebetshauch —— 是も 空の息 ばかり; 故に乏しきを kümmerlich (15) 嘆いてゐる. 20. Hoffnungsvolle —— ironisch, 祈らば神は助け給はんと, 空しく多くの望みをかける.
26. wie mein's —— wie es (ein Herz) meine —— 憐まうと思ふやうな. 33. heilig glühend —— 高遠なる目的を達せんと奮勵すること. Aeschylus に從へば, Prometheus は人間の保護者で,人間に對して非常な慈悲を持つてゐた,其死ぬといふ運命を有つてゐる人間を愛するあまりに Prometheus は無限の悲痛を感ずるのであつた. 卽ち其の理想的意力は宿命の罪惡と相結んで,茲に彼が人間精神の偉大は悲壯な色彩を帶びるのである. 36. dem Schlafenden —— 爲すことも無くして眠れるもの (Zeus).

Ganymed.

1778 (od. 1774, od. 1777) 成る. Homer によれば,往昔 Troja の王子 Ganymed は其容貌の秀麗な爲に天山 Olymp に招喚されて,神と等しく不死の命を賜はり,且つ Zeus 神の近昵とされたといふ話がある. それを Goethe は採つて來て, Ganymed 或朝春光の麗かさを見ると,急に現世的の高い幸福(愛)が戀しくなり, 有ゆる光榮の源なる昔の神(卽ち

れる人.　15. Grunelu —— 新鮮の冷々と心持の好い(雨後の)水蒸氣の昇ることを言ふ.

Suleika.

前章參照 —— 是れも „Buch Suleika" の一. 然し是は Goethe では無く, Suleika (Marianne) が 1815, Sept. に作つたのを, Goethe は其天才に感じたあまり自作の中に加へたのである.

2. West —— der Westwind ; Persien では東風は戀の便になつてゐるさうな. (獨逸の) 柔かい濕つた西風は卽ち戀人. 4. durch die —— Goethe は in die と改めた.　10. wunden —— 涙に 襲はれて傷へた.　12. wir sehn —— Goethe は zu sehn ihn と改めた.　13. 13. spreche —— sprich.　16. verschweig —— Goethe は verdirg と改めた.　17. Sag ihm nur, doch —— Goethe は Sag ihm, aber と改作した.　19. von beiden —— von „Liebe und Leben" (9,12 參照).

Frühling.

1824, Mai に成る.

3. immer neue —— いつ聞いても飽きない.

Mai.

Aus den „neu griechischen Liebes-Skolien." 1827 公にせらる.

2. lockt sie wieder —— Nachtigall (Philomile in Mythologie) は Frühling の子で, 春の (去年) 行つたのを深く嘆いてゐると, 春は再び生れかはつて來て其の愛子を招く.　4. alte, liebe —— 耳なれた, 卽ち最も面白い.

Herbstnacht am See.

8. Lied aus den „chinesisch-deuschen Jahres- und Tageszeiten." 9. am östlichen Bereiche —— 東の空.　12. nächsten —— つひ近へ, 遠くは暗くて觀者(作者)には見えぬから. 13. bewegte u. s. w. —— 譯の通り.

Sonnenaufgang im Gebirge.

Aus „Faust" (II. Teil). 1827 (oder 1828) に成つた, Goethe が瑞西旅行 (1797) の時に感じた光景を叙したのだといふ.

1. erschlossen —— aufgeschlossen, 花の開いて中の蕋を現はすが如く.　2. Leben —— 鳥.　11. verkünden —— 其煌々たる光を以て.　die feierlichste Stunde —— 太陽今や將に莊麗の面を現はさんとす.

Sommernacht.

Aus „Faust" (II. Teil)　1827 (od. 1828) に成る.

5. Lispelt —— Faust (此 Drama の主人公)に始終ついてゐる溫良な精が呟くの也.

Mahomets Gesang.

Lobgesang an Mahomet といふ意,卽ち Mahomet を讃する歌. 1772, od. 1773 に成つた. Mahomet といふ Drama を作らんとして完成はしなかつたが,其一節に用ふる意であつたのである. さて此歌は謂ゆる Allegorie (寓意) で, Mahomet の得道して山を出てから,遂に諸國を征服するまでの Leben を, 岩角を出でゝ大河となり遂に海に注ぐ水に譬へてゐる.　4. Über Wolken —— 雲井に聳える岩間で.　21. seinem Hauch —— 其飛沫にぬれて.

Schäfers Klagelied.

1801 に成る. Volkslied 風の殆んど叙事詩的趣味がある.第一節では山上に於ける, 第二節では途上の, 第三節では牧場の,第四節では樹蔭の牧人を描き,第五節では虹の橋の懸つた空家(昔戀人の住んでゐた)の前で戀人を偲ぶ.

6. mein Hündchen —— 自分は胸の思で羊などを守つてゐる勇氣もないから, 犬に任せて. 14. Verpaß' —— 雨も嵐も心にかけず勝手に降り荒れるに任せて樹蔭に惘然として佇立んでゐる. 19. Sie —— meine Geliebte.

Trost in Tränen.

1803, Sept. に成る. かひなき戀に泣く人とそれを憐む友との對話で成つてゐる. ,, " の附いてゐるのは其失戀者の言葉.

2. Da —— da doch = Während doch. 15. verloren hab' ich's nicht —— 本來持たないのだから: 卽ち初から自分の戀は叶ふ見込がないのだから. 18. junges Blut —— junger Mensch. (Engl. —— a young blood). 30. lieben Tag —— 晝は戀人を見られるから, それで嬉しい日を. 32. mag —— Können = im stande sein.

Gefunden.

1813 の春に成つた. Symbolisch に其妻 Christiane Vulpius に逢つた思出.

2. so für mich —— 深き思に沈んで, 何の目的もなく.
4. mein Sinn —— それが私の此散歩の目的であつた.
18. Am stillen Orte —— 初めは公然の妻では無かつたから人目の關で隔てた處に Christiane を置いたのであつた.

Gleich und Gleich.

1814, April に成つた, 二人相逢うて相愛すといふ心を比喩に歌つたもの.

3. früh —— Glockenblume は春の花の中最も早く開く故に斯う言ふ.

Talismane.

Aus d. ,,Westöstlichen Divan" (,,Buch des Sängers"). 1815 に成り, 1816 に公にされた. Der ,,Westöstliche Divan" (Divan = Gedichtsammlung) は大部分 Persien の詩人 Hafis の歌を執つて Goethe が其獨逸魂を以て歌ひ作したので, 是は其の一.

7. hundert —— Persien の神 Allah は九十九の名を有つてゐる(百では無い); ,,der Allgerechte" 其第九十九番目の名.

Laßt mich weinen.

Aus d. 8. Buche des ,,Divans," dem ,,Buche Suleika." Suleika は Goethe の親友 Willemer (in Frankfurt) の妻 Marianne の事で, 其の詩才を有して趣味の高い事が Goethe との關係を殆んど親友の妻以上にして了つた女. 此詩は別れた戀人を遙けき旅路にして偲ぶ心を歌つたので.

1. umschränkt —— eingeschlossen. 4. Armenier —— 商賣に拔目の無い人種とされてゐる; わが邦の近江人, 若くは支那人といふが如し. 9. 希獵の諺. 11. Xerxes —— が戰に負けて Griechenland の奴隸となると定つた軍隊を見ると, 百年もたゝば此無數の人の中で活きてゐるものが一人も無からうと言つて泣いたといふ (Herodot).
12. Liebling —— Alexander der Große の愛した侍童名を Klitus と言つて Granikus 河で Alexander を救つたと稱せら

際別れたとは思はれぬ. 12. mir —— „zu mir" und „für mir" の兩義を含せたもの.

Mignon I.

Mignon は以太利語; ミグノンでは無く, ミニョンと發音する.

6. sie —— die finstre Nacht. 8. Erde —— は Fels の友と考へられて居る.

Dieselbe II.

1. Sehnsucht —— 故郷(以太利亞)を偲ぶ心. (前章小引參照). 9. Es schwindelt —— 慄るゝ悲みの爲に. 10. Eingeweide —— 茲では Herz.

Dieselbe III.

1. So laßt u. s. w. —— やがて實際に斯る天使の姿をするまで卽ち死んで天上に昇るまで)此儘に此姿をさせておいてくれ. 4. jenes festes Haus —— 墓. 9. jene himmlischen Gestalten —— 死んで行く Mignon を迎ふべき天使. 10. Sie fragen, u. s. w. —— 天上では此世のやうに男女の外形などには構はぬ. 13—16=其出迎へる天使に向つて Mignen の言ふ詞. 13. ohne Sorg' und Mühe —— Wilhelm に親切に世話されたから. 14. tiefen Schmerz —— けれども其 Wilhelm に救はるゝ以前には隨分苦痛したといふ心. genung —— 中央ライン沿岸の方言 = genug. 16. jung —— 若い時の 歡樂 (自分には無かつた) を再び得せしめよ.

Harfenspieler. I.

8. nicht allein —— 惱み悲みと共にあるから.

Derselbe. II.

5. Jeder wird u. s. w. —— 私 (Harfenspieler) の姿の無慘なのを見たら, 人は皆己れを私に比べれば幸福だと思ふだらう, 而して同情の涙を濺ぐだらう; 8. ich weiß —— 泣いてくれられても, なかなか嬉しいとは思はれぬ; 私の苦痛が眞にどれ丈け深いのだか能く覺つて泣くのでは無く, 唯表面だけの悼ましいのに同情を寄せるのに過ぎないから.

Derselbe. III.

4. euch (himmlische Mächte) —— 因あれば果あらしめる天の力, 非業には必ず苦痛を下す天の力.

Meeres Stille.

暴風將に起らむとする前, 先づ海の寂然として, 鎭まりかへる光景なり. 一唱忽ち心奧の戰慄するを感せん. 悟りすましたる禪僧なんどの寂然として定に入れる樣にも似たらずや. 日蓮上人が斬首の場に座せる時の心事, 恐らは正にかゝりしなるべし.

5. keiner —— irgend einer.

Glückliche Fahrt.

Meeres Stille と反對の情緒. —— 希望 = 歡喜.
3. Aeolus —— 希臘の詩人 Homer に據れば, 風の神.
4. ängstliche —— beängstigende (trans.) 7—10 —— 舟中旅人の言葉.

1. Dem Schnee, u. s. w. —— 五月ではあつたが,山で二日間吹雪に逢つたのであつた. 13. eigen —— sonderbar, seltsam. 16. Wälderwärts —— 戀人のゐる Weimar を出來る丈け隔つて, Thüringer Wald の方へ行く.

An den Mond.

,,月の歌" 中の白眉と稱せられる此詩は 1778, Februar に成つた. 情景併せ描いて一唱 直ちに讀者の空想を潑剌 ちしめる. 其內容を略言すれば: 煌々たる(然し曇り易い)月の光と,絶ゆる間も無い水の流れとは,消えて歸らぬ尊き幸(戀)を思ひ出させる(1—20); が此思想はやがて永遠の藝術を自覺する崇高な念となり, (22—28). 且つ己を慰める信實な友人の今居殘つてゐる幸福を認める (29—36) に終る.

1. wieder —— 長き冬もすぎ,春となつて復.
2. Nebelglanz —— 霞んで朧な月の光. 15. Scherz und Kuß Und die Treue —— 戀人との昔の夢の跡.
18. so —— so über alle Maßen. 19. doch —— 如何に忘れんとしても,何うしても. 25—28 の Wenn 以下は 23 の Rausche, flüstre に係る. 30. ohne Haß —— 戀と誠と責られたけれども,人を憎まず,人を恨まず. 33. Was ..... nicht bedacht —— 世人には識られぬ,よし識られても其眞價の世人から認められないもの 卽ち 詩歌, 藝術.

Wandrers Nachtlied.

1780, September 六日の晩(又は二日の夜) Weimar の西南 Ilmenau 市附近の山上なる Weimar 侯が涼亭の南面の壁に鉛筆を走らせて記した歌. 1831 歌詩人が最後の誕生日に再び端なく是を發見して非常に今昔の感にうたれたといふので有名な詩. 其深山の靜寂がそゞろに詩人をして,浮世の苦

艱に休む間も無い其胸の, 平和ならんことを願はしめたのであつた.

1. 遠きに始めて近きに及んでゐる描寫法に注意しなければならぬ: 眼前の 山頂 から,涼亭の周圍の 森 を寫して,更に 小鳥 を眺めて,さて 自分の胸 を思ふ.
7. balde —— 方言, bald. 8. Ruhest du —— 此 ,,休み" は肉體をいふのでも無く, 死ぬことでも無く, 胸の平和; —— du は我が胸.

Elfenlied.

1780, Okt. 十四日の夜成り, Frau von Stein に献げて,ほのかに戀の二人の間を歌つたもの. Die Elfen (純新高獨乙語の Elben) は北國神話で,人間の姿を持つた小さい優しい精だとしてある. 此の精は人間に親切で且つ其心を鎭め休ましめるものと信ぜられ, 靜かな月の麗しい晩は草葉 花の上を其綺麗な光る姿が歌ひつ舞ひつしてゐるといふ話.

3. Stern —— 單數だが,實は日本語のやうに群星の意.
7. Erlen —— 木の名と Goethe は用ひてゐるが, 是れは素 Herder が蘭語の ellerkonge (elverkonge ═ 光る魔ノ王 ═ Elfen König) を Erlkönig と譯したので, Goethe も亦間違つて Erle は池沼に生へる高い木の名と思つたのである. が,茲では夫れで一向差支は無い. 10. einen Traum —— 夢幻のやうな踊を見る.

An die Entfernte.

1789 に公にされたけれども,實は已に 1778 頃に出來たので,戀人(恐らく Lili) を偲ぶの歌であらうと言ふ.

1. So —— もう思ふまいと疾うから決心したに拘らず,思出されて成らぬ; さう,別れたのだ, 然し夫れでも 實

—— 酒の雜り氣の無いことから轉じた, 醇清, 純粹の意.
13. Goethe が1775, 二月十三日に友人に與へた書簡に, „自分は銀燭燦爛として目眩ゆい, きらびやかな座敷の, 樣々な人の群がる中で, 二つ(Lili の) 美しい眼に惹きつけられて, Spieltisch (カルタなどを弄ぶ小机) に座つてゐた" と書いてゐる. 18. nur —— お前の心を覓め得てからといふものは.

Auf dem See.

これも Lilielieder の一: (小引參照.)
1. Und —— と劈頭から落筆したのは此 Lyrik を非常に餘韻のある印象の强いものにした. 敢へて此 und を初めに用ひたのは, 恐らく詩人は胸中夙くより樣々な思想が搖らいでゐたのだが, いざと筆を執ると其 感想の最高潮 が筆端を流れ出でゝ, 忽ちにして此詩となつた; 卽ち und 以前は餘白として文字の上には現はれなかつたのである. 2. freier Welt —— 狹い Frankfurt の究屈な交際社會を脫して.
7. Berge —— Alpen の千古の雪を戴いてゐる群岳をいふ.
9—12 情想忽ち一變して, 韻脚亦從て一變する.
10. Träume —— Lili を偲ぶの心. 11. Hier —— hier in der Natur, (此自然に於て).

Herbstgefühl.

是れも Lilielieder の一. 自然の心は何ぞ? 曰く愛! 愛は天地に漲りて自然を動かし, 又わが胸を動かす. 自然の愛に葡萄が熟つて, 甘い露を滴らしむるのは, 我が胸裡の愛の悶え悶えて, 遂に溢れて涙と流れるのにさながらである. ゲエテは庭前の葡萄を眺めながら, 此歌を口占んだ.
5. Zwillingsbeeren —— Zwilling と敢へて形容したのは, 14 の Augen に對應させる爲. 7. brütet —— 暖める. Scheideblick —— 夕日の光, (これで見ると, ゲエテの部屋は西向であつたことがわかる). 10. Fülle —— umsäuselt

—— 字面では風が吹くのみのやうであるが, Fülle から考へて雨の濡らす意も籠つてゐると思はねばならぬ.
fruchtende —— befruchtende (tr.).

Jägers Abendlied.

是も Lilielieder の一; 但し 1776 の Januar に公にされた.
1. still und wild —— 表面自分唯ひとり 靜に 歩いてゐるやうだが, 內心は失戀の爲に悶えて 氣も氣で無い; だから忽ち歩みが 靜か になり, 忽ち 荒々しく なる.
5 Du —— 戀人を指す. 5. still und mild —— 自分とは反對に, 自分と別れても悲しくも無からうから, 平氣で靜かに逍遙してゐるだらう. 9. des Menschen —— das Bild des Menschen = mein Bild: 其の我が姿を思ひいやづる? 14. als …… zu sehen —— als ich sähe.
16. wie mir geschehn —— wie es mir geschehen ist.

Wandrers Nachtlied.

1776, Februar の作. ゲエテは Weimar の國賓として, 宮廷の驕奢な生活に身を投じたのを, 父や親友が其 歡逸樂の爲に詩才を傷りはせぬかと言つて, 忠告するやら, 訓戒するやら, 加ふるに主ある花の Frau von Stein と道ならぬ道に踏入らむとさへしてゐるので, 胸の苦しさは 譬ふるに物が 無い; 卽ち 內心の平和 を此詩で求めんとしたのである.
1. Der du —— Friede を指す.

Rastlose Liebe.

是は Frau van Stein との戀の苦樂を唱つたもの: 1776, 五月六日 Ilmenau 市附近の山で作つた.

—— mit dem Morgen des nächsten Tages. 32. Götter —— 23 を見よ.

Mailied.

五月の歌ではあるが, 日本とは違ふ寒い北獨逸では丁度春に當るのである; 東北地方の春は恐らく四五月よりも六月であらう. 其つもりで此歌を讀まなければならぬ. 1771年の五月は大方 Goethe は Friederike の家に在つた; 戀の歡喜の溢るゝ眼を擧げて, 麗らかな自然の春を仰ぐ, 其胸裡の幸福は漲つて此歌に無限に美くしい調べを添へた. 一唱讀者の心を躍らす此の佳調は明かに其間の消息を傳へてゐる.

14. golden —— adverb: schön wie Gold. 15. Morgenwolken —— 東雲の空の紅燃ゆる雲は Gottesliebe の神嚴崇美の比喩に用ひられるので, Goethe が斯く Liebe を形容したのは, 其人の生の戀をば清淨の理想に高めんとした爲めなのだ. 17. Du —— Liebe を指して且つ間接に自然を言ふ: Goetheの胸中には已に Liebe と Natur とは融合してゐるのだ.

19. Im Blütendampfe u. s. w. —— 花の霞の棚曳くやうな其景色. 25 — 28 = 理想的の靈化した戀の比喩. 27. Und Morgenblumen —— und so lieben Morgenblumen den Himmelsduft. 31. Jugend —— 若やかな清新な詩的靈興.

Heidenröslein.

Goethe が學生時代の師友 Herder の編纂した Volkslied (民謠, 俗曲) の一を執つて, Goethe はかの破れた戀の悲みと悔いとを托した歌; 形式は Ballade (譚歌) であるが, 實は矢張 Gefühlslyrik で, 此の形式は Volkslied に數々用ひられてゐる. 此詩で Goethe と Friederike との戀が何故破れるに至つたかゝ, 略々推察される; 勿論 Knabe は Goethe で, Röslein は Friederike なのです.

2. Röslein —— に Artikel が無い: これは 8 の Knabe の如く, 固有名詞として假用したからである. 2. auf der Heiden —— は無垢なきつすゐの自然の兒と言ふ意; Heide と用ふべき所を Heiden としたのは, auf Erden u. s. w. の如く, よくある慣用法. 6. Röslein rot —— rotes Röslein; Gedicht, 殊に Volkslied では數々ある用法; 而して此の Refrain (重句) は Röslein の身の上の氣遣しさに戒むる意. 13. 此の Refrain はやがて來るべき懊惱を豫想した調子. 18. kein Weh und Ach —— 嘆きも呻きも. 20. 此處の Refrain は苦痛を現はす.

Neue Liebe, neues Leben.

1774 の秋の末より Goethe は Frankfurt の寡婦の娘 Lili Schönemann を識つた. 家は銀行を業とし極めて富裕なので, 大分おべつかる可厭な連中が寄り集るので, Lili は戀しいが其連中が可厭だ; それで Goethe は其頃悶を此歌にうたつた. であるから, ——

3. 今まで曾て覺えぬ. 不思儀な生活をする心地がする: (今までの戀では偏へに唯戀人なつかしと思ふばかりであつたが, 今度は餘程赴きが違う; Willkommen und Abschied, u. s. w. を參照せよ.) 5. 曾て喜びとし, 悲みとしてゐたものは皆消えて了つた. 7. Fleiß —— 靜かに籠居て勉强すてことも出來ぬ. (其勉强の結果として „Werther," „Göß" 等が出來たのだ.) 21. muß —— [ich] muß. 24. Liebe —— 自分の Liebesgefühl を人格化したもの.

An Belinden.

これも Lilielieder の一. Belinde といふ詞は佛の Molière, 英の Pope 等の用ひたもので, 當時の獨逸では Geliebte に對する詩的名稱として一般に用ひてゐた.

4. öden —— stillen, einsamen. 10. Ungemischter

Morgen bist du grau,
190 Und nur braun erscheinst du wieder dort.

„Höre, Mutter, nun die letzte Bitte:
Einen Scheiterhaufen schichte du!
Öffne meine bange kleine Hütte,
Bring' in Flammen Liebende zur Ruh!
200 Wenn der Funke sprüht,
Wenn die Asche glüht,
Eilen wir den alten Göttern zu.

Erläuterungen
zu
Goethes Gedichte.

(数字にて示せるは行数なり.)

Willkommen und Abschied.

此歌は三段に分れて居る: 第一段は戀人がり赴く光景(1—16), 第二段は其の歡待(17—25), 第三段は別れ(25—32). 唯四節で戲曲的に其情熱然ゆるが如き戀する人の行動と情意を描寫した所に, わが詩人の天才が十分に現はれてゐる.

1. geschwind zu Pferde —— ich eilte zu Hferde zu meiner Geliebten. 2. wiegte —— Der Aberd (wie eine Mutter) wiegte zum Schlummer die schlaftrunkene Erde. 4. hing —— 夜を帷幕と見て かゝる といふ. 6. aufgetürmter —— 塔(Turm)のやうに高く立つてゐる. 7. Finsternis —— 闇黑を人格化して百の眼で見てゐるといふ; 一寸日本人には解しねる修辭, いや, 外國にもあまり例の無い大膽な形容である. 10. kläglich —— klagend, 卽ち愁然として; —— Duft —— Dunst の詩的用語, 卽ち水煙, 靄, 霞. 11. Flügel —— 希臘羅馬の 風の神は肩と頭に翼を持つてゐる; それで斯う言ふ. 16. Dich —— 戀人 Friederike を指して言ふ. 20. Atemzug —— 此處では Augenblick の義で, お前ばかりを見てゐた, お前の顏から目を放されぬといふ意. 21. ein rosenfarbenes, etc. —— 其美しい面は春の朝の天のやうに, 薔薇の色をさして微笑んだ. 23. Zärtlichkeit —— やさしい振舞, やさしい言葉 —— für mich —— 私に(示し且つ言つた). 23. ihr Götter —— 無限の歡喜を現はす歎詞; ihr は 2. Person, pl. 24. es —— かくまでに私に優しくしてくれること. 25. mit der Morgensonne

Horchet an der Tür und horchet lange,
130 Welch ein sonderbarer Ton es sei.
Klag- und Wonnelaut
Bräutigams und Braut
Und des Liebestammelns Raserei.

Unbeweglich bleibt sie an der Türe,
135 Weil sie erst sich überzeugen muß,
Und sie hört die höchsten Liebesschwüre,
Lieb'- und Schmeichelworte, mit Verdruß:
„Still! der Hahn erwacht!"—
„„Aber morgen Nacht
140 Bist du wieder da?"" — und Kuß auf Kuß.

Länger hält die Mutter nicht das Zürnen,
Öffnet das bekannte Schloß geschwind:
‚Gibt es hier im Hause solche Dirnen,
Die dem Fremden gleich zu Willen sind?' —
145 So zur Thür hinein.
Bei der Lampe Schein
Sieht sie — Gott! sie sieht ihr eigen Kind.

Und der Jüngling will im ersten Schrecken
Mit des Mädchens eignen Schleierflor
150 Mit dem Teppich die Geliebte decken;
Doch sie windet gleich sich selbst hervor.
Wie mit Geist's Gewalt
Hebet die Gestalt
Lang und langsam sich im Bett' empor.

155 „Mutter! Mutter!" spricht sie hohle Worte:
„So mißgönnt ihr mir die schöne Nacht!
Ihr vertreibt mich von dem warmen Orte!
Bin ich zur Verzweiflung nur erwacht?

Ist's euch nicht genug,
160 Daß ins Leichentuch,
Daß ihr früh mich in das Grab gebracht?

„Aber aus der schwerbedeckten Enge
Treibet mich ein eigenes Gericht.
165 Eurer Priester summende Gesänge
Und ihr Segen haben kein Gewicht;
Salz und Wasser kühlt
Nicht, wo Jugend fühlt;
Ach! die Erde kühlt die Liebe nicht.

170 „Dieser Jüngling war mir erst versprochen,
Als noch Venus' heitrer Tempel stand.
Mutter, habt ihr doch das Wort gebrochen,
Weil ein fremd, ein falsch Gelübd' euch band!
Doch kein Gott erhört,
175 Wenn die Mutter schwört,
Zu versagen ihrer Tochter Hand.

„Aus dem Grabe werd' ich ausgetrieben,
Noch zu suchen das vermißte Gut,
Noch den schon verlornen Mann zu lieben
180 Und zu saugen seines Herzens Blut.
Ist's um den geschehn,
Muß nach Andern gehn,
Und das junge Volk erliegt der Wut.

„Schöner Jüngling! kannst nicht länger leben!
185 Du versiechest nun an diesem Ort.
Meine Kette hab' ich dir gegeben;
Deine Locke nehm' ich mit mir fort.
Sieh sie an genau!

Unsrer Väter Schwur
70 Hat vom Himmel Segen uns erfleht.“ “

„Mich erhältst du nicht, du gute Seele!
Meiner zweiten Schwester gönnt man dich.
Wenn ich mich in stiller Klause quäle,
Ach! in ihren Armen denk' an mich,
75 Die an dich nur denkt,
Die sich liebend kränkt!“
In die Erde bald verbirgt sie sich.

„ „Nein! bei dieser Flamme sei's geschworen,
Gütig zeigt sie Hymen uns voraus,
80 Bist der Freude nicht und mir verloren,
Kommst mit mir in meines Vaters Haus.
Liebchen, bleibe hier,
Feire gleich mit mir
Unerwartet unsern Hochzeitsschmaus!“ “

85 Und schon wechseln sie der Treue Zeichen;
Golden reicht sie ihm die Kette dar,
Und er will ihr eine Schale reichen,
Silbern, künstlich, wie nicht eine war.
„Die ist nicht für mich;
90 Doch, ich bitte dich,
Eine Locke gib von deinem Haar.“

Eben schlug die dumpfe Geisterstunde,
Und nun schien es ihr erst wohl zu sein.
Gierig schlürfte sie mit blassem Munde
95 Nun den dunkel blutgefärbten Wein;
Doch vom Weizenbrot,
Das er freundlich bot,
Nahm sie nicht den kleinsten Bissen ein.

Und dem Jüngling reichte sie die Schale,
100 Der, wie sie, nun hastig lüstern trank.
Liebe fordert er beim stillen Mahle;
Ach, sein armes Herz war liebekrank.
Doch sie widersteht,
Wie er immer fleht,
105 Bis er weinend auf das Bette sank.

Und sie kommt und wirft sich zu ihm nieder:
„Ach, wie ungern seh' ich dich gequält!
Aber, ach! berührst du meine Glieder,
Fühlst du schaudernd, was ich dir verhehlt.
110 Wie der Schnee so weiß,
Aber kalt wie Eis,
Ist das Liebchen, das du dir erwählt.“

Heftig faßt er sie mit starken Armen,
Von der Liebe Jugendkraft durchmannt:
115 „ „Hoffe doch bei mir noch zu erwarmen,
Wärst du selbst mir aus dem Grab gesandt!“ “
Wechselhauch und Kuß!
Liebesüberfluß!
„ „Brennst du nicht und fühlest mich entbrannt!“ “

120 Liebe schließet fester sie zusammen,
Tränen mischen sich in ihre Lust;
Gierig saugt sie seines Mundes Flammen,
Eins ist nur im andern sich bewußt.
Seine Liebeswut
125 Wärmt ihr starres Blut,
Doch es schlägt kein Herz in ihrer Brust.

Unterdessen schleichet auf dem Gange
Häuslich spät die Mutter noch vorbei,

Er ist noch ein Heide mit den Seinen,
Und sie sind schon Christen und getauft.
Keimt ein Glaube neu,
Wird oft Lieb' und Treu
Wie ein böses Unkraut ausgerauft.

Und schon lag das ganze Haus im stillen,
Vater, Töchter, nur die Mutter wacht;
Sie empfängt den Gast mit bestem Willen,
Gleich ins Prunkgemach wird er gebracht.
Wein und Essen prangt,
Eh' er es verlangt:
So versorgend wünscht sie gute Nacht.

Aber bei dem wohlbestellten Essen
Wird die Lust der Speise nicht erregt;
Müdigkeit läßt Speis' und Trank vergessen,
Daß er angekleidet sich auf's Bette legt;
Und er schlummert fast,
Als ein seltner Gast
Sich zur offnen Tür herein bewegt.

Denn er sieht, bei seiner Lampe Schimmer
Tritt, mit weißem Schleier und Gewand,
Sittsam still ein Mädchen in das Zimmer,
Um die Stirn ein schwarz- und goldnes Band.
Wie sie ihn erblickt,
Hebt sie, die erschrickt,
Mit Erstaunen eine weiße Hand.

„Bin ich," rief sie aus, „so fremd im Hause,
Daß ich von dem Gaste nichts vernahm?
Ach, so hält man mich in meiner Klause!
Und nun überfällt mich hier die Scham.

Ruhe nur so fort
Auf dem Lager dort,
Und ich gehe schnell, so wie ich kam."

„„Bleibe, schönes Mädchen!"" ruft der Knabe,
Rafft von seinem Lager sich geschwind:
„„Hier ist Ceres', hier ist Bachus' Gabe;
Und du bringst den Amor, liebes Kind!
Bist vor Schrecken blaß!
Liebe, komm und laß,
Laß uns sehn, wie froh die Götter sind.""

„Ferne bleib'! o Jüngling! bleibe stehen,
Ich gehöre nicht den Freuden an.
Schon der letzte Schritt ist, ach! geschehen,
Durch der guten Mutter kranken Wahn,
Die genesend schwur:
Jugend und Natur
Sei dem Himmel künftig untertan.

„Und der alten Götter bunt Gewimmel
Hat sogleich das stille Haus geleert.
Unsichtbar wird Einer nur im Himmel,
Und ein Heiland wird am Kreuz verehrt;
Opfer fallen hier,
Weder Lamm noch Stier,
Aber Menschenopfer unerhört."

Und er frage und wäget alle Worte,
Deren keines seinem Geist entgeht.
‚Ist es möglich, daß am stillen Orte
Die geliebte Braut hier vor mir steht?'
„„Sei die meine nur!

Doch muß ich hier gefangen sein
Und muß mich einsam quälen.
Du bist mir zwar ein schönes Bild
Von mancher Jungfrau, rein und mild:
Doch weiß ich noch was Liebers.

Nelke.

Das mag wohl ich, die Nelke, sein,
Hier in des Wächters Garten;
Wie würde sonst der Alte mein
Mit so viel Sorgen warten?
Im schönen Kreis der Blätter Drang
Und Wohlgeruch des Leben lang
Und alle tausend Farben.

Graf.

Die Nelke soll man nicht verschmähn,
Sie ist des Gärtners Wonne;
Bald muß sie in dem Lichte stehn,
Bald schützt er sie vor Sonne;
Doch was den Grafen glücklich macht,
Es ist nicht ausgesuchte Pracht,
Es ist ein stilles Blümchen.

Veilchen.

Ich steh' verborgen und gebückt,
Und mag nicht gerne sprechen;
Doch will ich, weil sich's eben schickt;
Mein tiefes Schweigen brechen.
Wenn ich es bin, du guter Mann,
Wie schmerzt mich's, daß ich hinauf nicht kann
Dir alle Gerüche senden.

Graf.

Das gute Veilchen schätz' ich sehr;
Es ist so gar bescheiden

Und duftet so schön; doch brauch' ich mehr
In meinem herben Leiden.
Ich will es euch nur eingestehn:
Auf diesen dürren Felsenhöhn
Ist's Liebchen nicht zu finden.

Doch wandelt unten an dem Bach
Das treuste Weib der Erde,
Und seufzet leise manches Ach,
Bis ich erlöset werde.
Wenn sie ein blaues Blümchen bricht,
Und immer sagt: „Vergiß mein nicht!"
So fühl' ich's in der Ferne.

Ja, in der Ferne fühlt sich die Macht,
Wenn Zwei sich redlich lieben:
Drum bin ich in des Kerkers Nacht
Auch noch lebendig geblieben.
Und wenn mir fast das Herze bricht,
So ruf' ich nur: „Vergiß mein nicht!"
Da komm' ich wieder ins Leben.

Die Braut von Korinth.

Nach Korinthus von Athen gezogen
Kam ein Jüngling, dort noch unbekannt.
Einen Bürger hofft' er sich gewogen;
Beide Väter waren gastverwandt,
Hatten frühe schon
Töchterchen und Sohn
Braut und Bräutigam voraus genannt.

Aber wird er auch willkommen scheinen,
Wenn er teuer nicht die Gunst erkauft?

Geziert und gesegnet, dem Türmer zum Glück;
Sie blinkt von metallenen Kreuzen.

Das Hemd muß er haben, da rastet er nicht,
Da gilt auch kein langes Besinnen,
Den gotischen Zierrat ergreift nun der Wicht
Und klettert von Zinne zu Zinnen.
Nun ist's um den Armen, den Türmer, getan,
Es ruckt sich von Schnörkel zu Schnörkel hinan,
Langbeinigen Spinnen vergleichbar.

Der Türmer erbleichet, der Türmer erbebt,
Gern gäb' er ihn wieder, den Laken.
Da häkelt — jetzt hat er am längsten gelebt —
Den Zipfel ein eiserner Zacken.
Schon trübet der Mond sich verschwindenden Scheins,
Die Glocke, sie donnert ein mächtiges Eins,
Und unten zerschellt das Gerippe.

Das Blümlein Wunderschön.

Lied des gefangnen Grafen.

Graf.

Ich kenn' ein Blümlein Wunderschön
Und trage darnach Verlangen;
Ich möcht' es gerne zu suchen gehn,
Allein ich bin gefangen.
Die Schmerzen sind mir nicht gering;
Denn als ich in der Freiheit ging,
Da hatt' ich es in der Nähe.

Von diesem ringsum steilen Schloß
Laß' ich die Augen schweifen,

Und kann's von hohem Turmgeschoß
Mit Blicken nicht ergreifen;
Und wer mir's vor die Augen brächt',
Es wäre Ritter oder Knecht,
Der sollte mein Trauter bleiben.

Rose.

Ich blühe schön, und höre dies
Hier unter deinem Gitter.
Du meinest mich, die Rose, gewiß,
Du edler, armer Ritter!
Du hast gar einen hohen Sinn;
Es herrscht die Blumenkönigin
Gewiß auch in deinem Herzen.

Graf.

Dein Purpur ist aller Ehren wert
Im grünen Überkleide;
Darob das Mädchen dein begehrt,
Wie Gold und edel Geschmeide.
Dein Kranz erhöht das schönste Gesicht,
Allein du bist das Blümchen nicht,
Das ich im stillen verehre.

Lilie.

Das Röslein hat gar stolzen Brauch
Und strebet immer nach oben;
Doch wird ein liebes Liebchen auch
Der Lilie Zierde loben.
Wem's Herze schlägt in treuer Brust
Und ist sich rein, wie ich, bewußt,
Der hält mich wohl am höchsten.

Graf.

Ich nenne mich zwar keusch und rein,
Und rein von bösen Fehlen;

Mit Menschenwitz und Menschenlist
Hinauf in Todesglut?
Ach wüßtest du, wie's Fischlein ist
So wohlig auf dem Grund,
Du stiegst herunter, wie du bist,
Und würdest erst gesund.

„Labt sich die liebe Sonne nicht,
Der Mond sich nicht im Meer?
Kehrt wellenatmend ihr Gesicht
Nicht doppelt schöner her?
Lockt dich der tiefe Himmel nicht,
Das feuchtverklärte Blau?
Lockt dich dein eigen Angesicht
Nicht her in ew'gen Tau?"

Das Wasser rauscht', das Wasser schwoll
Neßt' ihm den nackten Fuß;
Sein Herz wuchs ihm so sehnsuchtsvoll,
Wie bei der Liebsten Gruß.
Sie sprach zu ihm, sie sang zu ihm;
Da war's um ihn geschehn:
Halb zog sie ihn, halb sank er hin,
Und ward nicht mehr gesehn.

Der Totentanz.

Der Türmer, der schaut zu Mitten der Nacht
Hinab auf die Gräber in Lage;
Der Mond, der hat alles ins Helle gebracht,
Der Kirchhof, er liegt wie am Tage.
Da regt sich ein Grab und ein anderes dann:

Sie kommen hervor, ein Weib da, ein Mann,
In weißen und schleppenden Hemden.

Das reckt nun — es will sich ergötzen sogleich —
Die Knöchel zur Runde, zum Kranze,
So arm und so jung, und so alt und so reich;
Doch hindern die Schleppen am Tanze.
Und weil hier die Scham nun nicht weiter gebeut,
Sie schütteln sich alle, da liegen zerstreut
Die Hemdelein über den Hügeln.

Nun hebt sich der Schenkel, nun wackelt das Bein,
Gebärden da gibt es vertrackte;
Dann klippert's und klappert's mitunter hinein,
Als schlüg' man die Hölzlein zum Takte.
Das kommt nun dem Türmer so lächerlich vor;
Da raunt ihm der Schalk, der Versucher, ins Ohr:
„Geh! hole dir einen der Laken!"

Getan wie gedacht! Und er flüchtet sich schnell
Nun hinter geheiligte Türen.
Der Mond und noch immer er scheinet so hell
Zum Tanz, den sie schauderlich führen.
Doch endlich verlieret sich dieser und der,
Schleicht eins nach dem andern gekleidet einher,
Und husch! ist es unter dem Rasen.

Nur Einer, der trippelt und stolpert zuletzt
Und tappet und grapf't an den Grüften;
Doch hat kein Geselle so schwer ihn verletzt;
Er wittert das Tuch in den Lüften.
Er rüttelt die Turmtür, sie schlägt ihn zurück,

Er saß beim Königmahle,
Die Ritter um ihn her,
Auf hohem Väterfaale
Dort auf dem Schloß am Meer.

Dort stand der alte Zecher,
Trank letzte Lebensglut
Und warf den heil'gen Becher
Hinunter in die Flut.

Er sah ihn stürzen, trinken
Und sinken tief ins Meer.
Die Augen täten ihm sinken;
Trank nie einen Tropfen mehr.

Erlkönig.

Wer reitet so spät durch Nacht und Wind?
Es ist der Vater mit seinen Kind;
Er hat den Knaben wohl in dem Arm,
Er faßt ihn sicher, er hält ihn warm.

„Mein Sohn, was birgst du so bang dein Gesicht?" —
„„Siehst, Vater, du den Erlkönig nicht?
Den Erlenkönig mit Kron' und Schweif?"" —
„Mein Sohn, es ist ein Nebelstreif." —

‚Du liebes Kind, komm, geh mit mir!
Gar schöne Spiele spiel' ich mit dir;
Manch' bunte Blumen sind an dem Strand,
Meine Mutter hat manch gülden Gewand.'

„„Mein Vater, mein Vater, und hörest du nicht,
Was Erlenkönig mir leise verspricht?"" —

„Sei ruhig, bleibe ruhig, mein Kind!
In dürren Blätten säuselt der Wind." —

‚Willst, feiner Knabe, du mit mir gehn?
Meine Töchter sollen dich warten schön;
Meine Töchter führen den nächtlichen Reihn,
Und wiegen und tanzen und singen dich ein.'

„„Mein Vater, mein Vater, und siehst du nicht dort
Erlkönigs Töchter am düstern Ort?"" —
„Mein Sohn, mein Sohn, ich seh' es genau,
Es scheinen die alten Weiden so grau." —

‚Ich liebe dich, mich reizt deine schöne Gestalt;
Und bist du nicht willig, so brauch' ich Gewalt.'
„„Mein Vater, mein Vater, jetzt faßt er mich an!
Erlkönig hat mir ein Leids getan!"" —

Dem Vater grauset's, er reitet geschwind;
Er hält in Armen das ächzende Kind,
Erreicht den Hof mit Mühe und Not;
In seinen Armen das Kind war tat.

Der Fischer.

Das Wasser rauscht', das Wasser schwoll,
Ein Fischer saß daran,
Sah nach dem Angel ruhevoll,
Kühl bis ans Herz hinan.
Und wie er sitzt und wie er lauscht,
Teilt sich die Flut empor:
Aus dem bewegten Wasser rauscht
Ein feuchtes Weib hervor.

Sie sang zu ihm, sie sprach zu ihm:
„Was lockst du meine Brut

Balladen.

Der Sänger.

„Was hör' ich draußen vor dem Tor,
Was auf der Brücke schallen?
Laß den Gesang vor unserm Ohr
Im Saale wiederhallen!"
Der König sprach's, der Page lief;
Der Knabe kam, der König rief:
„Laßt mir herein den Alten!"

„Gegrüßet seid mir, edle Herrn,
Gegrüßt ihr, schöne Damen!
Welch reicher Himmel! Stern bei Stern!
Wer kennet ihre Namen?
Im Saal voll Pracht und Herrlichkeit
Schließt, Augen, euch; hier ist nicht Zeit,
Sich staunend zu ergötzen."

Der Sänger drückt' die Augen ein,
Und schlug in vollen Tönen;
Die Ritter schauten mutig drein,
Und in den Schoß die Schönen.
Der König, dem das Lied gefiel,
Ließ, ihn zu ehren für sein Spiel,
Eine goldne Kette holen.

„Die goldne Kette gib mir nicht,
Die Kette gib den Rittern,
Vor deren kühnem Angesicht
Der Feinde Lanzen splittern!
Gib sie dem Kanzler, den du hast,
Und laß ihn noch die goldne Last
Zu andern Lasten tragen!

„Ich singe, wie der Vogel singt,
Der in den Zweigen wohnet;
Das Lied, das aus der Kehle dringt,
Ist Lohn, der reichlich lohnet;
Doch, darf ich bitten, bitt' ich eins:
Laß mir den besten Becher Weins
In purem Golde reichen."

Er setzt' ihn an, er trank ihn aus:
„O Trank voll süßer Labe!
O! wohl dem hochbeglückten Haus,
Wo das ist kleine Gabe!
Ergeht's euch wohl, so denkt an mich,
Und danket Gott so warm, als ich
Für diesen Trunk euch danke!"

Der König in Thule.

Es war ein König in Thule,
Gar treu bis an das Grab,
Dem sterbend seine Buhle
Einen goldnen Becher gab.

Es ging ihm nichts darüber,
Er leert' ihn jeden Schmaus;
Die Augen gingen ihm über,
So oft er trank daraus.

Und als er kam zu sterben,
Zählt' er seine Städt' im Reich,
Gönnt' alles seinem Erben,
Den Becher nicht zugleich.

Euphrosyne hervor, dir zu erheitern den Blick.
Du vernimmst sie nicht mehr, die Töne des wachsenden Zöglings,
Die du zu liebendem Schmerz frühe, so frühe! gestimmt.
Andere kommen und gehn; es werden dir andre gefallen;
Selbst dem großen Talent drängt sich ein größeres nach.
Aber du, vergesse mich nicht! Wenn eine dir jemals
Sich im verworrnen Geschäft heiter entgegen bewegt,
Deinem Winke sich fügt, an deinem Lächeln sich freuet,
Und am Platze sich nur, den du bestimmtest, gefällt;
Wenn sie Mühe nicht spart noch Fleiß, wenn tätig der Kräfte,
Selbst bis zur Pforte des Grabs, freudiges Opfer sie bringt;
Guter, dann gedenkest du mein und rufest auch spät noch:
Euphrosyne, sie ist wieder erstanden vor mir!
Vieles sagt' ich noch gern; doch ach, die Scheidende weilt nicht,
Wie sie wollte; mich führt streng ein gebietender Gott.
Lebe wohl! schon zieht mich's dahin in schwankendem Eilen.
Einen Wunsch nur vernimm, freundlich gewähre mir ihn:
Laß nicht ungerühmt mich zu den Schatten hinabgehn!
Nur die Muse gewährt einiges Leben dem Tod.
Denn gestaltlos schweben umher in Persephoneias
Reiche massenweis' Schatten, vom Namen getrennt;
Wen der Dichter aber gerühmt, der wandelt gestaltet,
Einzeln, gesellet dem Chor aller Heroen sich zu.
Freudig tret' ich einher, von deinem Liede verkündet,
Und der Göttin Blick weilet gefällig auf mir.
Mild empfängt sie mich dann, und nennt mich; es winken die hohen
Göttlichen Frauen mich an, immer die nächsten am Thron.
Penelopeia redet zu mir, die treuste der Weiber,
Auch Euadne, gelehnt auf den geliebten Gemahl.
Jüngere nahen sich dann, zu früh herunter Gesandte,
Und beklagen mit mir unser gemeines Geschick.
Wenn Antigone kommt, die schwesterlichste der Seelen,

Und Polyxena, trüb' noch von dem bräutlichen Tod,
Seh' ich als Schwestern sie an und trete würdig zu ihnen;
Denn der tragischen Kunst holde Geschöpfe sind sie,
Bildete doch ein Dichter auch mich; und seine Gesänge,
Ja, sie vollenden an mir, was mir das Leben versagt."
Also sprach sie, und noch bewegte der liebliche Mund sich,
Weiter zu reden; allein schwirrend versagte der Ton.
Denn aus dem Purpurgewölk, dem schwebenden, immer bewegten,
Trat der herrliche Gott Hermes gelassen hervor;
Mild erhob er den Stab und deutete; wallend verschlangen
Wachsende Wolken im Zug beide Gestalten vor mir.
Tiefer liegt die Nacht um mich her; die stürzenden Wasser
Brausen gewaltiger nun neben dem schlüpfrigen Pfad.
Unbezwingliche Trauer befällt mich, entkräftender Jammer,
Und ein moosiger Fels stützet den Sinkenden nur.
Wehmut reißt durch die Saiten der Brust; die nächtlichen Tränen
Fließen, und über dem Wald kündet der Morgen sich an.

Ach, wer schätzt ihn genug, diesen vereilenden Wert!
Klein erscheinet es nun, doch ach! nicht kleinlich dem Herzen;
Macht die Liebe, die Kunst jegliches Kleine doch groß.
Denkst du der Stunde noch wohl, wie auf dem Brettergerüste
Du mich der höheren Kunst ernstere Stufen geführt?
Knabe schien ich, ein rührendes Kind, du nanntest mich Arthur,
Und belebtest in mir Brittisches Dichtergebild,
Drohtest mit grimmiger Glut den armen Augen, und wandtest
Selbst den tränenden Blick, innig getäuschet, hinweg.
Ach! da warst du so hold und schüßtest ein trauriges Leben,
Das die verwegene Flucht endlich dem Knaben entriß.
Freundlich faßtest du mich, den Zerschmetterten, trugst mich von dannen,
Und ich heuchelte lang', dir an dem Busen, den Tod!
Endlich schlug die Augen ich auf, und sah dich in ernste,
Stille Betrachtung versenkt, über den Liebling geneigt.
Kindlich strebt' ich empor, und küßte die Hände dir dankbar,
Reichte zum reinen Kuß dir den gefälligen Mund.
Fragte: Warum, mein Vater, so ernst? und hab' ich gefehlet,
O, so zeige mir an, wie mir das Bessre gelingt!
Keine Mühe verdrießt mich bei dir, und alles und jedes
Wiederhol' ich so gern, wenn du mich leitest und lehrst.
Aber du faßtest mich stark und drücktest mich fester im Arme,
Und es schauderte mir tief in dem Busen das Herz.
‚Nein! mein liebliches Kind', so riefst du, ‚alles und jedes,
Wie du es heute gezeigt, zeig' es auch morgen der Stadt.
Rühre sie alle, wie mich du gerührt, und es fließen zum Beifall
Dir von dem trockensten Aug' herrliche Tränen herab.
Aber am Tiefsten trafst du doch mich, den Freund, der im Arm dich
Hält, den selber der Schein früherer Leiche geschreckt.
Ach, Natur, wie sicher und groß in allem erscheinst du!
Himmel und Erde befolgt ewiges, festes Gesetz,

Jahre folgen auf Jahre, dem Frühlinge reichet der Sommer,
Und dem reichlichen Herbst traulich der Winter die Hand.
Felsen stehen gegründet, es stürzt sich das ewige Wasser
Aus der bewölkten Kluft schäumend und brausend hinab.
Fichten grünen so fort, und selbst die entlaubten Gebüsche
Hegen im Winter schon heimliche Knospen am Zweig.
Alles entsteht und vergeht nach Gesetz; doch über des Menschen
Leben, dem köstlichen Schatz, herrschet ein schwankendes Los.
Nicht dem blühenden nickt der willig scheidende Vater,
Seinem trefflichen Sohn, freundlich vom Rande der Gruft;
Nicht der Jüngere schließt dem Älteren immer das Auge,
Das sich willing gesenkt, kräftig dem Schwächeren zu.
Öfter, ach, verkehrt das Geschick die Ordnung der Tage:
Hilflos klaget ein Greis Kinder und Enkel umsonst,
Steht, ein beschädigter Stamm, dem rings zerschmetterte Zweige
Um die Seiten umher strömende Schloßen gestreckt.
Und so, liebliches Kind, durchdrang mich die tiefe Betrachtung,
Als du zur Leiche verstellt über die Arme mir hingst;
Aber freudig seh' ich dich mir in dem Glanze der Jugend,
Vielgeliebtes Geschöpf, wieder am Herzen belebt.
Springe fröhlich dahin, verstellter Knabe! Das Mädchen
Wächs't zur Freude der Welt, mir zum Entzücken heran.
Immer strebe so fort, und deine natürlichen Gaben
Bilde bei jeglichem Schritt steigenden Lebens die Kunst.
Sei mir lange zur Lust, und eh' mein Auge sich schließet,
Wünsch' ich dein schönes Talent glücklich vollendet zu sehn'. —
Also sprachst du, und nie vergaß ich der wichtigen Stunde!
Deutend entwickelt' ich mich an dem erhabenen Wort.
O, wie sprach ich so gerne zum Volk die rührenden Reden,
Die du, voller Gehalt, kindlichen Lippen vertraut!
O, wie bildet' ich mich an deinen Augen, und suchte
Dich im tiefen Gedräng' staunender Hörer heraus!
Doch dort wirst du nun sein und stehn, und nimmer bewegt sich

Die stille Welt zu meinen Füßen,
Entzündet alle Höhn beruhigt jedes Tal,
Den Silberbach in goldne Ströme fließen.
Nicht hemmte dann den göttergleichen Lauf
Der wilde Berg mit alten seinen Schluchten;
Schon tut das Wasser sich mit erwärmten Buchten
Vor den erstaunten Augen auf.
Doch scheint die Göttin endlich wegzusinken;
Allein der neue Trieb erwacht,
Ich eile fort, ihr ewiges Licht zu trinken,
Vor mir den Tag und hinter mir die Nacht,
Den Himmel über mir und unter mir die Wellen.
Ein schöner Traum, indessen sie entweicht!
Ach! zu des Geistes Flügeln wird so leicht
Kein körperlicher Flügel sich gesellen.
Doch ist es jedem eingeboren,
Daß sein Gefühl hinauf und vorwärts dringt,
Wenn über uns, im blauen Raum verloren,
Ihr schmetternd Lied die Lerche singt,
Wenn über schroffen Fichtenhöhen
Der Adler ausgebreitet schwebt,
Und über Flächen, über Seen
Der Kranich nach der Heimat strebt.

Euphrosyne.

Auch von des höchsten Gebirgs beeisten Gipfeln
Schwindet Purpur und Glanz scheidender Sonne hinweg.
Lange verhüllt schon Nacht das Tal und die Pfade des Wandrers,
Der, am tosenden Strom auf zu der Hütte sich sehnt,
Zu dem Ziele des Tags, der stillen, hirtlichen Wohnung;
Und der göttliche Schlaf eilet gefällig voraus,

Dieser holde Geselle des Reisenden. Daß er auch heute
Segnend kränze das Haupt mir mit dem heiligen Mohn!
Aber was leuchtet mir dort vom Felsen glänzend herüber,
Und erhellet den Duft schäumender Ströme so hold?
Strahlt die Sonne vielleicht durch heimliche Spalten und Klüfte?
Denn kein irdischer Glanz ist es, der wandelnde, dort.
Näher wälzt sich die Wolke, sie glüht. Ich staune dem Wunder!
Wird der rosige Strahl nicht ein bewegtes Gebild?
Welche Göttin nahet sich mir? und welche der Musen
Suchet den treuen Freund, selbst in dem grausen Geklüft?
Schöne Göttin! enthülle dich mir, und täusche, verschwindend,
Nicht den begeisterten Sinn, nicht das gerührte Gemüt.
Nenne, wenn du es darfst vor einem Sterblichen, deinen
Göttlichen Namen; wo nicht, rege bedeutend mich auf,
Daß ich fühle, welche du seist von den ewigen Töchtern
Zeus', und der Dichter sogleich preise dich würdig im Lied!
„Kennst du mich, Guter, nicht mehr? Und käme diese Gestalt dir
Die du doch sonst geliebt, schon als ein fremdes Gebild?
Zwar der Erde gehör' ich nicht mehr, und trauernd entschwang sich
Schon der schaudernde Geist jugendlich frohem Genuß;
Aber ich hoffte mein Bild noch fest in des Freundes Erinnerung
Eingeschrieben, und noch schön durch die Liebe verklärt.
Ja, schon sagt mir gerührt dein Blick, mir sagt es die Träne:
Euphrosyne, sie ist noch von dem Freunde gekannt.
Sieh, die Scheidende zieht durch Wald und grauses Gebirge,
Sucht den wandernden Mann, ach, in der Ferne noch auf,
Sucht den Lehrer, den Freund, den Vater, blicket noch einmal
Nach dem leichten Gerüst irdischer Freuden zurück.
Laß mich der Tage gedenken, da mich, das Kind, du dem Spiele,
Jener täuschenden Kunst reizender Musen, geweiht.
Laß mich der Stunde gedenken, und jedes kleineren Umstands!
Ach, wer ruft nicht so gern Unwiederbringliches an!
Jenes süße Gedränge der leichtesten irdischen Tage,

Hat nicht mich zum Manne geschmiedet
Die allmächtige Zeit
Und das ewige Schicksal,
Meine Herrn und deine?

Wähntest du etwa
Ich sollte das Leben hassen,
In Wüsten fliehen,
Weil nicht alle
Blütenträume reiften?

Hier sitz' ich, forme Menschen
Nach meinem Bilde,
Ein Geschlecht, das mir gleich sei,
Zu leiden, zu weinen,
Zu genießen und zu freuen sich —
Und dein nicht zu achten,
Wie ich!

Ganymed.

Wie im Morgenglanze
Du rings mich anglühst,
Frühling, Geliebter!
Mit tausendfacher Liebeswonne
Sich an mein Herz drängt
Deiner ewigen Wärme
Heilig Gefühl,
Unendliche Schöne!

Daß ich dich fassen möcht'
In diesen Arm!

Ach, an deinem Busen
Lieg' ich, schmachte,
Und deine Blumen, dein Gras
Drängen sich an mein Herz.
Du kühlst den brennenden
Durst meines Busens,
Lieblicher Morgenwind!
Ruft drein die Nachtigall
Liebend nach mir aus dem Nebeltal.
Ich komm', ich komme!
Wohin? Ach, wohin?

Hinauf! Hinauf strebt's.
Es schweben die Wolken
Abwärts, die Wolken
Neigen sich der sehnenden Liebe.
Mir! Mir!
In euerm Schooße
Aufwärts!
Umfangend umfangen!
Aufwärts an deinen Busen,
Alliebender Vater!

Hinauf und vorwärts.

Betrachte, wie in Abendsonneglut
Die grünumgebnen Hütten schimmern.
Sie rückt und weicht, der Tag ist überlebt!
Dort eilt sie hin und fördert neues Leben.
O, daß kein Flügel mich vom Boden hebt,
Ihr nach und immer nach zu streben!
Ich säh' in ewigen Abendstrahl

Stufenweise
Zum Abgrund.

Im flachen Bette
Schleicht er das Wiesental hin,
Und in dem glatten See
Weiden ihr Antlitz
Alle Gestirne.

Wind ist der Welle
Lieblicher Buhler;
Wind mischt vom Grund aus
Schäumende Wogen.

Seele des Menschen,
Wie gleichst du dem Wasser!
Schicksal des Menschen,
Wie gleichst du dem Wind!

Prometheus.

Bedecke deinen Himmel, Zeus,
Mit Wolkendunst
Und übe, dem Knaben gleich,
Der Disteln köpft,
An Eichen dich und Bergeshöhn!
Mußt mir meine Erde
Doch lassen stehn,
Und meine Hütte, die du nicht gebaut,
Und meinen Herd,
Um dessen Glut
Du mich beneidest.

Ich kenne nichts Ärmeres
Unter der Sonn', als euch, Götter!
Ihr nähret kümmerlich
Von Opfersteuern
Und Gebetshauch
Eure Majestät,
Und darbtet, wären
Nicht Kinder und Bettler
Hoffnungsvolle Toren.

Da ich ein Kind war,
Nicht wußte, wo aus noch ein,
Kehrt' ich mein verirrtes Auge
Zur Sonne, als wenn drüber wär'
Ein Ohr, zu hören meine Klage,
Ein Herz wie mein's,
Sich des Bedrängten zu erbarmen.

Wer half mir
Wider der Titanen Übermut?
Wer rettete vom Tode mich,
Von Sklaverei?
Hast du nicht alles selbst vollendet,
Heilig glühend Herz?
Und glühtest jung und gut,
Betrogen, Rettungsdank
Dem Schlafenden da droben?

Ich dich ehren? Wofür?
Hast du die Schmerzen gelendert
Je des Beladenen?
Hast du die Tränen gestillet
Je des Geängsteten?

Und die Flüsse von der Ebne
Und die Bäche von den Bergen
Jauchzen ihm und rufen: „Bruder!
Bruder, nimm die Brüder mit,
Mit zu deinem alten Vater,
Zu dem ew'gen Ocean,
Der mit ausgespannten Armen
Unser wartet,
Die sich, ach! vergebens öffnen,
Seine Sehnenden zu fassen;
Denn uns frißt in öder Wüste
Gier'ger Sand; die Sonne droben
Saugt an unserm Blut; ein Hügel
Hemmet uns zum Teiche! Bruder,
Nimm die Brüder von der Ebne,
Nimm die Brüder von den Bergen
Mit, zu deinem Vater mit!"

„Kommt ihr Alle!" —
Und nun schwillt er
Herrlicher; ein ganz Geschlechte
Trägt den Fürsten hoch empor,
Und im rollenden Triumphe
Giebt er Ländern Namen, Städte
Werden unter seinem Fuß.

Unaufhaltsam rauscht er weiter,
Läßt der Türme Flammengipfel,
Marmorhäuser, eine Schöpfung
Seiner Fülle, hinter sich.

Cedernhäuser trägt der Atlas
Auf den Riesenschultern; sausend

Wehen über seinem Haupte
Tausend Flaggen durch die Lüfte,
Zeugen seiner Herrlichkeit.

Und so trägt er seine Brüder,
Seine Schätze, seine Kinder,
Dem erwartenden Erzeuger
Freudebrausend an das Herz.

Gesang der Geister über den Wassern.

Des Menschen Seele
Gleicht dem Wasser:
Vom Himmel kommt es,
Zum Himmel steigt es,
Und wieder nieder
Zur Erde muß es,
Ewig wechselnd.

Strömt von der hohen
Steilen Felswand
Der reine Strahl,
Dann stäubt er lieblich
In Wolkenwellen
Zum glatten Fels,
Und, leicht empfangen,
Wallt er verschleiernd,
Leisrauschend
Zur Tiefe nieder.

Ragen Klippen
Dem Sturz entgegen,
Schäumt er unmutig

Hinaufgeschaut!—Der Berge Gipfelriesen
Verkünden schon die feierlichste Stunde;
Sie dürfen früh des ew'gen Lichts genießen,
Das später sich zu uns hernieder wendet.
Jetzt zu der Alpe grüngesenkten Wiesen
Wird neuer Glanz und Deutlichkeit gespendet,
Und stufenweis herab ist es gelungen:
Sie tritt hervor! — und leider schon geblendet,
Kehr' ich mich weg, vom Augenschmerz durchdrungen.

Sommernacht.

Wenn sich lau die Lüfte füllen
Um den grünumschränkten Plan,
Süße Düfte, Nebelhüllen
Senkt die Dämmerung heran;
Lispelt leise süßen Frieden,
Wiegt das Herz in Kindesruh;
Und den Augen dieses Müden
Schließt des Tages Pforte zu!

Nacht ist schon hereingesunken,
Schließt sich heilig Stern an Stern;
Große Lichter, kleine Funken
Glitzern nah und glänzen fern;
Glitzern hier im See sich spiegelnd,
Glänzen droben klarer Nacht;
Tiefsten Ruhens Glück besiegelnd,
Herrscht des Mondes volle Pracht.

Mahomet's Gesang.

Seht den Felsenquell,
Freudehell,

Wie ein Sternenblick!
Über Wolken
Nährten seine Jugend
Gute Geister
Zwischen Klippen im Gebüsch.

Jünglingfrisch
Tanzt er aus der Wolke
Auf die Marmorfelsen nieder,
Jauchzet wieder
Nach dem Himmel.

Durch die Gipfelgänge
Jagt er bunten Kieseln nach,
Und mit frühem Führertritt
Reißt er seine Bruderquellen
Mit sich fort.

Drunten werden in dem Tal
Unter seinem Fußtritt Blumen,
Und die Wiese
Lebt von seinem Hauch.

Doch ihn hält kein Schattental,
Keine Blumen,
Die ihm seine Knie' umschlingen,
Ihm mit Liebesaugen schmeicheln:
Nach der Ebne dringt sein Lauf
Schlangenwandelnd.

Bäche schmiegen
Sich gesellig an. Nun tritt er
In die Ebne silberprangend,
Und die Ebne prangt mit ihm,

Die Bewegung deiner Flügel
Weckt im Busen stilles Sehnen;
Blumen, Auen, Wald und Hügel
Stehn bei deinem Hauch in Tränen.

Doch dein mildes, sanftes Wehen
Kühlt die wunden Augenlieder;
Ach, für Leid müßt' ich vergehen
Hofft' ich nicht, wir sehn uns wieder.

Geh denn hin zu meinem Lieben,
Spreche sanft zu seinem Herzen,
Doch vermeid, ihn zu betrüben,
Und verschweig ihm meine Schmerzen!

Sag ihm nur, doch sag's bescheiden:
Seine Liebe sei mein Leben!
Freudiges Gefühl von beiden
Wird mir seine Nähe geben.

Frühling.

Das holde Tal hat schon die Sonne wieder
Mit Frühlingsblüt' und -Blumen angefüllt;
Die Nachtigall singt immer neue Lieder
Dem Hochgefühl, das ihr entgegenquillt.
Erfreue dich der gottverliehnen Gaben!
Froh, wie Er dich erschuf, will Er dich haben.

Mai.

Die Nachtigall, sie war entfernt,
Der Frühling lockt sie wieder;

Was Neues hat sie nicht gelernt,
Singt alte, liebe Lieder.

Herbstnacht am See.

Dammerung senkte sich von oben,
Schon ist alle Nähe fern;
Doch zuerst emporgehoben
Holden Lichts der Abendstern!
Alles schwankt ins Ungewisse,
Nebel schleichen in die Höh';
Schwarzvertiefte Finsternisse
Widerspiegelnd, ruht der See.

Nun am östlichen Bereiche
Ahn' ich Mondenglanz und -Glut;
Schlanker Weiden Haargezweige
Scherzen auf der nächsten Flut.
Durch bewegter Schatten Spiele
Zittert Lunas Zauberschein,
Und durchs Auge schleicht die Kühle
Sänftigend ins Herz hinein.

Sonnenaufgang im Gebirge.

In Dämmerschein liegt schon die Welt erschlossen,
Der Wald ertönt von tausendstimm'gen Leben,
Talaus, talein ist Nebelstreif ergossen;
Doch senkt sich Himmelsklarheit in die Tiefen,
Und Zweig' und Äste, frisch erquickt, entsprossen
Dem duft'gen Abgrund, wo versenkt sie schliefen;
Auch Farb' an Farbe klärt sich los vom Grunde,
Wo Blum' und Blatt von Zitterperle triefen.
Ein Paradies wird um mich her die Runde.

Wie Sterne leuchtend,
Wie Äuglein schön.

Ich wollt' es brechen,
Da sagt' es fein:
Soll ich zum Welken
Gebrochen sein?

Ich grub's mit allen
Den Würzlein aus,
Zum Garten trug ich's
Am hübschen Haus.

Und pflanzt' es wieder
Am stillen Ort;
Nun zweigt es immer
Und blüht so fort.

Gleich und Gleich.

Ein Blumenglöckchen
Vom Boden hervor
War früh gesprosset
In lieblichem Flor;

Da kam ein Bienchen
Und naschte fein: —
Die müssen wohl beide
Für einander sein.

Talismane.

Gottes ist der Orient!
Gottes ist der Occident!

Nord- und südliches Gelände
Ruht im Frieden seiner Hände.

Er, der einzige Gerechte,
Will für jedermann das Rechte.
Sei von seinen hundert Namen
Dieser hochgelobt! Amen.

Laßt mich weinen.

Laßt mich weinen! Umschränkt von Nacht,
In unendlicher Wüste!
Kamele ruhn, die Treiber desgleichen;
Rechnend still wacht der Armenier.
Ich aber neben ihm berechne die Meilen,
Die mich von Suleika trennen, wiederhole
Die wegverlängernden, ärgerlichen Krümmungen.

Laßt mich weinen! Das ist keine Schande;
Weinende Männer sind gut.
Weinte doch Achill um seine Briseis!
Xerxes beweinte das unerschlagene Heer.
Über den selbstgemordeten Liebling
Alexander weinte.
Laßt mich weinen! Tränen beleben den Staub;
Schon grünelt's.

Suleika.

Ach, um deine feuchten Schwingen,
West, wie sehr ich dich beneide!
Denn du kannst ihm kunde bringen,
Was ich durch die Trennung leide.

Ich breche sie, ohne zu wissen,
Wem ich sie geben soll.

Und Regen, Sturm und Gewitter
Verpaff' ich unter dem Baum.
Die Türe dort bleibet verschlossen;
Doch alles ist leider ein Traum.
Es stehet ein Regenbogen
Wohl über jenem Haus!
Sie aber ist weggezogen,
Und weit in das Land hinaus,

Hinaus in das Land und weiter,
Vielleicht gar über die See.
Vorüber, ihr Schafe, vorüber!
Dem Schäfer ist gar so weh.

Trost in Thränen.

Wie kommt's, daß du so traurig bist,
Da alles froh erscheint?
Man sieht dir's an den Augen an,
Gewiß, du hast geweint.

„Und hab' ich einsam auch geweint,
So ist's mein eigner Schmerz,
Und Tränen fließen gar so süß,
Erleichtern mir das Herz."

Die frohen Freunde laden dich:
O, komm an unsre Brust!
Und was du auch verloren hast,
Vertraue den Verlust.

„Ihr lärmt und rauscht und ahnet nicht,
Was mich, den Armen, quält.
Ach nein, verloren hab' ich's nicht,
So sehr es mir auch fehlt."

So raffe denn dich eilig auf!
Du bist ein junges Blut.
In deinen Jahren hat man Kraft
Und zum Erwerben Mut.

„Ach nein, erwerben kann ich's nicht,
Es steht mir gar zu fern;
Es weilt so hoch, es blinkt so schön,
Wie droben jener Stern."

Die Sterne, die begehrt man nicht,
Man freut sich ihrer Pracht,
Und mit Entzücken blickt man auf
In jeder heitern Nacht.

„Und mit Entzücken blick' ich auf
So manchen lieben Tag;
Verweinen laßt die Nächte mich,
So lang' ich weinen mag."

Gefunden.

Ich ging im Walde
So für mich hin,
Und nichts zu suchen,
Das war mein Sinn.

Im Schatten sah ich
Ein Blümchen stehn,

Mich Einsamen die Qual.
Ach! werd' ich erst einmal
Einsam im Grabe sein,
Da läßt sie mich allein!

Derselbe.

An die Türen will ich schleichen,
Still und sittsam will ich stehn;
Fromme Hand wird Nahrung reichen,
Und ich werde weiter gehn.

Jeder wird sich glücklich scheinen,
Wenn mein Bild vor ihm erscheint;
Eine Träne wird er weinen,
Und ich weiß nicht, was er weint.

Derselbe.

Wer nie sein Brod mit Tränen aß,
Wer nie die kummervollen Nächte
Auf seinem Bette weinend saß,
Der kennt euch nicht, ihr himmlischen Mächte!

Ihr führt in's Leben uns hinein,
Ihr laßt den Armen schuldig werden,
Dann überlaßt ihr ihn der Pein:
Denn alle Schuld rächt sich auf Erden.

Meeres Stille.

Tiefe Stille herrscht im Wasser,
Ohne Regung ruht das Meer,

Und bekümmert sieht der Schiffer
Glatte Fläche rings umher.
Keine Luft von keiner Seite!
Todesstille fürchterlich!
In der ungeheuern Weite
Reget keine Welle sich.

Glückliche Fahrt.

Die Nebel zerreißen,
Der Himmel ist helle,
Und Äolus löset
Das ängstliche Band.
Es säuseln die Winde,
Es rührt sich der Schiffer.
„Geschwinde! Geschwinde!
Es teilt sich die Welle,
Es nacht sich die Ferne;
Schon seh' ich das Land!“

Schäfers Klagelied.

Da droben auf jenem Berge
Da steh' ich tausendmal,
An meinem Stabe gebogen,
Und schaue hinab in das Tal.

Dann folg' ich der weidenden Herde,
Mein Hündchen bewahret mir sie;
Ich bin herunter gekommen
Und weiß doch selber nicht wie.

Da stehet von schönen Blumen
Die ganze Wiese so voll;

Ich möchte dir mein ganzes Innre zeigen;
Allein das Schicksal will es nicht.

Zur rechten Zeit vertreibt der Sonne Lauf
Die finstre Nacht, und sie muß sich erhellen;
Der harte Fels schließt seinen Busen auf,
Mißgönnt der Erde nicht die tiefverborgnen Quellen.

Ein jeder sucht in Arm Freundes Ruh',
Dort kann die Brust in Klagen sich ergießen;
Allein ein Schwur drückt mir die Lippen zu,
Und nur ein Gott vermag sie aufzuschließen.

Dieselbe.

Nur wer die Sehnsucht kennt,
Weiß, was ich leide.
Allein und abgetrennt
Von aller Freude,
Seh' ich an's Firmament
Nach jener Seite.
Ach! der mich liebt und kennt,
Ist in der Weite.
Es schwindelt mir, es brennt
Mein Eingeweide.
Nur wer die Sehnsucht kennt,
Weiß, was ich leide!

Dieselbe.

So laßt mich scheinen, bis ich werde;
Zieht mir das weiße Kleid nicht aus!

Ich eile von der schönen Erde
Hinab in jenes feste Haus.

Dort ruh' ich eine kleine Stille,
Dann öffnet sich der frische Blick;
Ich lasse dann die reine Hülle,
Den Gürtel und den Kranz zurück.

Und jene himmlischen Gestalten,
Sie fragen nicht nach Mann und Weib,
Und keine Kleider, keine Falten
Umgeben den verklärten Leib.

„Zwar lebt' ich ohne Sorg' und Mühe,
Doch fühlt' ich tiefen Schmerz genung.
Vor Kummer altert' ich zu frühe;
Macht mich auf ewig wieder jung!"

Harfenspieler.

Wer sich der Einsamkeit ergiebt,
Ach! der ist bald allein;
Ein jeder lebt, ein jeder liebt,
Und läßt ihn seiner Pein. —

Ja! laßt mich meiner Qual!
Und kann ich nur einmal
Recht einsam sein,
Dann bin ich nicht allein.

Es schleicht ein Liebender lauschend sacht,
Ob seine Freundin allein?
So überschleicht bei Tag und Nacht
Mich Einsamen die Pein,

Rausche, flüstre meinem Sang
Melodien zu,

Wenn du in der Winternacht
Wütend überschwillst,
Oder um die Frühlingspracht
Junger Knospen quillst.

Selig, wer sich vor der Welt
Ohne Haß verschließt,
Einen Freund am Busen hält
Und mit dem genießt,

Was von Menschen nicht gewußt,
Oder nicht bedacht,
Durch das Labyrinth der Brust
Wandelt in der Nacht.

Wandrers Nachtlied.

Über allen Gipfeln
Ist Ruh',
In allen Wipfeln
Spürest du
Kaum einen Hauch;
Die Vögelein schweigen im Walde.
Warte nur, balde
Ruhest du auch.

Elfenlied.

Um Mitternacht, wenn die Menschen erst schlafen,
Dann scheint uns der Mond,

Dann leuchtet uns der Stern;
Wir wandeln und singen
Und tanzen erst gern.

Um Mitternacht, wenn die Menschen erst schlafen,
Auf Wiesen, an den Erlen,
Wir suchen unsern Raum
Und wandeln und singen
Und tanzen einen Traum.

An die Entfernte.

So hab' ich wirklich dich verloren?
Bist du, o Schöne, mir entflohn?
Noch klingt in den gewohnten Ohren
Ein jedes Wort, ein jeder Ton.

So wie des Wandrers Blick am Morgen
Vergebens in die Lüfte dringt,
Wenn, in dem blauen Raum verborgen,
Hoch über ihm die Lerche singt:

So dringet ängstlich hin und wieder
Durch Feld und Busch und Wald mein Blick;
Dich rufen alle meine Lieder;
O komm, Geliebte, mir zurück!

Mignon.

Heiß mich nicht reden, heiß mich schweigen;
Denn mein Geheimnis ist mir Pflicht.

Ein stiller Friede kommt auf mich,
Weiß nicht, wie mir geschehn.

Wandrers Nachtlied.

Der du von dem Himmel bist,
Alles Leid und Schmerzen stillest,
Den, der doppelt elend ist,
Doppelt mit Erquickung füllest,
Ach, ich bin des Treibens müde!
Was soll all der Schmerz und Lust?
Süßer Friede,
Komm, ach komm in meine Brust!

Rastlose Liebe.

Dem Schnee, dem Regen,
Dem Wind entgegen,
Im Dampf der Klüfte,
Durch Nebeldüfte,
Immer zu! Immer zu!
Ohne Rast und Ruh!

Lieber durch Leiden
Möcht' ich mich schlagen,
Als so viel Freuden
Des Lebens ertragen.
Alle das Neigen
Von Herzen zu Herzen,
Ach wie so eigen
Schaffet das Schmerzen!

Wie soll ich fliehen?
Wälderwärts ziehen?

Alles vergebens!
Krone des Lebens,
Glück ohne Ruh',
Liebe, bist du!

An den Mond.

Füllest wieder Busch und Tal
Still mit Nebelglanz,
Lösest endlich auch einmal
Meine Seele ganz;

Breitest über mein Gefild
Lindernd deinen Blick,
Wie des Freundes Auge mild
Über mein Geschick.

Jeden Nachklang fühlt mein Herz
Froh- und trüber Zeit,
Wandle zwischen Freud' und Schmerz
In der Einsamkeit.

Fließe, fließe, lieber Fluß!
Nimmer werd' ich froh;
So verrauschte Scherz und Kuß,
Und die Treue so.

Ich besaß es doch einmal,
Was so köstlich ist!
Daß man doch zu seiner Qual
Nimmer es vergißt!

Rausche, Fluß, das Tal entlang,
Ohne Rast und Ruh'!

Wo du, Engel, bist, ist Lieb' und Güte,
Wo du bist, Natur.

Auf dem See.

Und frische Nahrung, neues Blut
Saug' ich aus freier Welt;
Wie ist Natur so hold und gut,
Die mich am Busen hält!
Die Welle wieget unsern Kahn
Im Rudertakt hinauf,
Und Berge, wolkig himmelan,
Begegnen unserm Lauf.

Aug', mein Aug', was sinkst du nieder?
Goldne Träume, kommt ihr wieder?
Weg, du Traum! so gold du bist!
Hier auch Lieb' und Leben ist.

Auf der Welle blinken
Tausend schwebende Sterne;
Weiche Nebel trinken
Rings die türmende Ferne;
Morgenwind umflügelt
Die beschattete Bucht,
Und im See bespiegelt
Sich die reifende Frucht.

Herbstgefühl.

Fetter grüne, du Laub,
Am Rebengeländer
Hier mein Fenster herauf!
Gedrängter quellet,

Zwillingsbeeren, und reifet
Schneller und glänzend voller!
Euch brütet der Mutter Sonne
Scheideblick; euch umsäuselt
Des holden Himmels
Fruchtende Fülle;
Euch kühlet des Mondes
Freundlicher Zauberhauch,
Und euch betauen, ach!
Aus diesen Augen
Der ewig belebenden Liebe
Vollschwellende Tränen.

Jägers Abendlied.

Im Felde schleich' ich still und wild,
Gespannt mein Feuerrohr,
Da schwebt so licht dein liebes Bild,
Dein süßes Bild mir vor.

Du wandelst jetzt wohl still und mild
Durch Feld und liebes Tal,
Und, ach! mein schnell verrauschend Bild
Stellt sich dir's nicht einmal?

Des Menschen, der die Welt durchstreift
Voll Unmut und Verdruß,
Nach Osten und nach Westen schweift,
Weil er dich lassen muß.

Mir ist es, denk' ich nur an dich,
Als in den Mond zu sehn;

Daß du ewig denkst an mich,
Und ich will's nicht leiden."
Röslein, Röslein, Röslein rot,
Röslein auf der Heiden.

Und der wilde Knabe brach
's Röslein auf der Heiden;
Röslein wehrte sich und stach,
Half ihm doch kein Weh und Ach,
Mußt' es eben leiden.
Röslein, Röslein, Röslein rot.
Röslein auf der Heiden.

Neue Liebe, neues Leben.

Herz, mein Herz, was soll das geben?
Was bedränget dich so sehr?
Welch ein fremdes, neues Leben!
Ich erkenne dich nicht mehr.
Weg ist alles, was du liebtest,
Weg, warum du dich betrübtest,
Dein Fleiß und deine Ruh'—
Ach, wie kamst du nur dazu?

Fesselt dich die Jugendblüte,
Diese liebliche Gestalt,
Dieser Blick voll Treu' und Güte
Mit unendlicher Gewalt?
Will ich rasch mich ihr entziehen,
Mich ermannen, ihr entfliehen,
Führet mich im Augenblick,
Ach, mein Weg zu ihr zurück.

Und an diesem Zauberfädchen,
Das sich nicht zerreißen läßt,
Hält das liebe, lose Mädchen
Mich so wider Willen fest;
Muß in ihrem Zauberkreise
Leben nun auf ihre Weise.
Die Veränd'rung, ach, wie groß!
Liebe! Liebe! laß mich los!

An Belinden.

Warum ziehst du mich unwiderstehlich,
Ach, in jene Pracht?
War ich guter Junge nicht so selig
In der öden Nacht?

Heimlich in mein Zimmerchen verschlossen,
Lag im Mondenschein,
Ganz von seinem Schauerlicht umflossen,
Und ich dämmert' ein;

Träumte da von vollen, goldnen Stunden
Ungemischter Lust,
Hatte schon dein liebe Kind empfunden,
Tief in meiner Brust.

Bin ich's noch, den du bei so viel Lichtern
An dem Spieltisch hältst?
Oft so unerträglichen Gesichtern
Gegenüber stellst?

Reizender ist mir des Frühlings Blüte
Nun nicht auf der Flur;

Doch ach, schon mit der Morgensonne
Verengt der Abschied mir das Herz:
In deinen Küssen, welche Wonne!
In deinem Auge, welcher Schmerz!
Ich ging, du standst und sahst zur Erden,
Und sahst mir nach mit nassem Blick;
Und doch, welch Glück, geliebt zu werden!
Und lieben, Götter, welch ein Glück!

Mailied.

Wie herrlich leuchtet
Mir die Natur!
Wie glänzt die Sonne!
Wie lacht die Flur!

Es bringen Blüten
Aus jedem Zweig
Und tausend Stimmen
Aus dem Gesträuch,

Und Freud' und Wonne
Aus jeder Brust.
O Erd', o Sonne!
O Glück, o Lust!

O Lieb', o Liebe!
So golden schön
Wie Morgenwolken
Auf jenen Höhn.

Du segnest herrlich
Das frische Feld,
Im Blütendampfe
Die volle Welt.

O Mädchen, Mädchen,
Wie lieb' ich dich!
Wie blickt dein Auge!
Wie liebst du mich!

So liebt die Lerche
Gesang und Luft,
Und Morgenblumen
Den Himmelsduft.

Wie ich dich liebe
Mit warmem Blut,
Die du mir Jugend
Und Freud' und Mut.

Zu neuen Liedern
Und Tänzen giebst.
Sie ewig glücklich,
Wie du mich liebst!

Heidenröslein.

Sah ein Knab' ein Röslein stehn,
Röslein auf der Heiden,
War so jung und morgenschön,
Lief er schnell, es nah zu sehn,
Sah's mit vielen Freuden.
Röslein, Röslein, Röslein rot,
Röslein auf der Heiden.
Knabe sprach: „ich breche dich,
Röslein auf der Heiden,"

Röslein sprach: „ich steche dich,

Suleika . . . . . 19.
Frühling . . . . . 20.
Mai . . . . . 20.
Herbstnacht am See . . . . . 21.
Sonnenaufgang im Gebirge . . . . . 21.
Sommernacht . . . . . 22.

Gedankenlyrik:

Mahomets Gesang . . . . . 22.
Gesang der Geister über den Wassern . . . . . 25.
Prometheus . . . . . 26.
Ganymed . . . . . 28.
Hinauf und vorwärts . . . . . 29.
Euphrosyne . . . . . 30.

Balladen:

Der Sänger . . . . . 36.
Der König in Thule . . . . . 37.
Der Fischer . . . . . 39.
Der Totentanz . . . . . 40.
Das Blümlein Wunderschön . . . . . 42.
Die Braut von Korinth . . . . . 45.

Goethe's Gedichte.

Willkommen und Abschied.

Es schlug mein Herz: geschwind zu Pferde!
Es war getan, fast eh' gedacht;
Der Abend wiegte schon die Erde
Und an den Bergen hing Nacht;
Schon stand im Nebelkleid die Eiche
Ein aufgetürmter Riese da,
Wo Finsternis aus dem Gesträuche
Mit hundert schwarzen Augen sah.

Der Mond von einem Wolkenhügel
Sah kläglich aus dem Duft hervor;
Die Winde schwangen leise Flügel,
Umsaus'ten schauerlich mein Ohr;
Die Nacht schuf tausend Ungeheuer,
Doch frisch und fröhlich war mein Mut:
In meinen Adern, welches Feuer!
In meinem Herzen, welche Glut!

Dich sah ich, und die milde Freude
Floß von dem süßen Blick auf mich;
Ganz war mein Herz an deiner Seite
Und jeder Atemzug für dich.
Ein rosenfarbnes Frühlingswetter
Umgab das liebliche Gesicht,
Und Zärtlichkeit für mich — Ihr Götter!
Ich hofft' es, ich verdient' es nicht.

Inhalt.

Gefühlslyrik:

Willkommen und Abschied . . . . . 1.
Mailied . . . . . 2.
Heidenröslein . . . . . 3.
Neue Liebe, neues Leben . . . . . 4.
An Belinden . . . . . 5.
Herbstgefühl . . . . . 6.
Jägers Abendlied . . . . . 7.
Wandrers Nachtlied . . . . . 8.
Rastlose Liebe . . . . . 8.
An den Mond . . . . . 9.
Wandrers Nachtlied . . . . . 10.
Elfenlied . . . . . 10.
An die Entfernte . . . . . 11.
Mignon . . . . . 11.
Dieselbe . . . . . 12.
Dieselbe . . . . . 12.
Harfenspieler . . . . . 13.
Derselbe . . . . . 14.
Derselbe . . . . . 14.
Meeres Stille . . . . . 14.
Glückliche Fahrt . . . . . 15.
Trost in Tränen . . . . . 16.
Gefunden . . . . . 17.
Gleich und Gleich . . . . . 18.
Talismane . . . . . 18.
Laßt mich weinen . . . . . 19.

Goethes

Gedichte.